

第七章 餘 錄

法然上人 繪傳に直接關係するものではないが、上人別傳として單行するものを次に解明しておこう。

1、法然上人祕傳 上人の弟子隆寛の撰述と傳えているが、これには古來異論が存する。而して凡そ三通りの異本がある。その内で最も普及している三卷本『祕傳』には惠柳子の序が付せられ、元祿十七年の刊本で淨土宗全書(卷十七・一 九一五二頁)にも編入されている。片假名書上、中、下三卷であるが、文章に脱落誤謬の箇所が多く意味の了解し能わぬ點もあるのである。

第二本は高野山中院御坊所藏本である。妻木直良氏がこれを庫中より發見し其の研究を六條學報第百七十一號誌上に發表し、また大正十二年九月、京都中外出版社より出版の佛教古典叢書に妻木氏が解説を付し本文は収録刊行されている。總體が漢文體和文である。表紙題號の下に「眞譽之」と記されている。譽號を用いているのは恐らく淨土宗鎮西派の僧であろうが、是れが直ちに妻木氏の想定される百萬遍知恩寺廿三世西蓮社眞譽(天文十年八月九日寂)であるとは斷定し難いのである。譽號は多くの人が用いるから眞譽という譽號あるのは百山廿三世に限らない。然し書寫の筆蹟、漢文體和文を用いている點などから推して室町中後期のものと察せらる。

元祿十七年刊の坊間流布(淨土宗全書所收)よりは確かに古いものを見出されたことは喜ばしい。兩者を比較するに出入あり錯雜するところありて兩本を對校しても容易に完本に複せしむることは六ヶしいが、大體に於て殆んど同程度の材料を包容していることが知られる。

望月信亨氏は法然上人全集の自序に於て「或は事實を紛亂故造して以て眞を濫るもの」として排除し、眞宗の學匠越後興隆は隆寛著述と認めず、慶證寺玄智は『眞宗教典』下卷に於て偽作なりと斷定している。その理由として上人の説法として支那劉宋が等活地獄に落ち獄卒が一首の歌を詠んだことを説く奇怪事（淨土宗全書卷一七、五〇―五一頁）は隆寛の記述すべき筋合のものではないのである。また大谷派の了詳は隆寛の著述を教義の面より検討し『善導實得祖鈔』『捨子問答』『閑亭物語』と共に『法然上人祕傳鈔』は後人仮托の書であると斷じている。

以上の如く『祕傳鈔』は隆寛律師の眞撰ではなからう。律師の法語や談話の語り傳えらるるものを基礎として談義僧が附會潤飾したものと考えらる。

元祿刊本の最後には

上人御誕生ヨリ御滅後ニ至ルマデ祕藏スル義共ヲ集メテ上中下ニシルス。堅々祕スベシ、又此ノ祕傳ト云ハ上人御在世ノ時、連々ニシルシ置キ給ヘル御筆ナリ、有時上人ヒソカニ取り出シテ父母ノ御事ヲ思召シ出シテ御涙ヲ流サセ給ヒシヲ、隆寛モノコシニ是ヲ拜見シ參リテ三箇年ノ程、訴訟ヲイタス上、志シノ至リヲ感ジ給ヒテ相傳セサセ給ヘリ、上人と縁深キ人ハサヒハヒニ此ノ祕傳ヲ拜見シ奉ルベキナリ

と記し、高野山中院本の終りにはただ簡單に

上人御誕生ヨリ御歿後至ニ祕藏義共纂ニ三卷注ニ堅外見不可レ及云々

というように上人より祕傳を聞いたところから『祕傳鈔』の名が出ている縁由書になつてゐる。

隆寛の名をかりた偽書ではあるが一體いつ頃のものであろうか。從來の元祿刊本だけでは江戸時代の偽作とも一往考えられて來たのであるが、妻木氏の高野山中院本發見によつて室町中期に遡らせうることになつたのである。

其後禿氏祐祥博士はまた別な室町時代の古寫本を手に入れたのである。同博士の厚意により全文書寫して、『法然上人傳全集』前篇(八〇八頁)に収録することにした。和文平仮名本で上下二卷、中間と結尾を缺いている殘缺本ではあるが全體として古調を保持していることである。また元祿本は淨土宗全書に高野山中院本は中外の佛敎古典叢書に夫々收載されているから未發表のものとして不完本ながら禿氏本を採録した次第である。

禿氏本『祕傳』をみるに、上人の登山を四十八卷傳には十五歳としているのを十三歳としている。これは『傳法繪』を始め傳法繪系統の弘願本、古德傳、琳阿本、増上寺本と、別系の私日記、十六門記、百因緣集の傳えるところである。

また上人小兒時代の容貌を「頭のくぼくしてかどあり。まなこ黄にしてひかりあり」(傳全集 八〇九頁) という表現は弘願本、古德傳とも共通で別に元亨釋書が傳えているのである。

右の二點から推察すると、此の『祕傳』は『弘願本』『古德傳』の類系に近いようであるが、『祕傳』の記事は錯雜している。即ち禿氏本下卷の初め(傳全集 八一〇頁)に

久安三年丁卯二月十三日つくりみちにて文殊御前ときの關白月輪殿の御出にあいたてまつり云々

と記す。久安三年は上人十五歳である。十五歳上洛登山説を立てるは四十八卷傳と九卷傳とである。『祕傳』は同一本にあつて上に述べる如く既に十三歳説をとり乍ら、また十五歳上洛という此の兩説を兼ねて記しているのである。ところがこれは單なる祕傳のみの誤記ではない。『拾遺古德傳』が此の『祕傳』と同じく十三歳登山、久安三年丁卯春月輪殿に參會したと記述しているので、『祕傳』はこの誤ちと「頭のくぼみ説」と共に『古德傳』からひきついでいるようである。また鳥羽つくりみちにて小兒が關白に出あつたとせば法性寺忠通という四十八傳説は首肯

出来るが月輪殿兼實(久安五年出生)はまだ生れていないので此の誤りをもうけついでいる。次に淨土開宗については

聖人行年四十三にて黒谷の經藏をひらき諸經論を一々に披見して聖道淨土の要義をくわしく料簡して聖道門をさしおき淨土門にいり

という四十三歳開宗説である。此の點は四十八卷傳、九卷傳、十六門記等と同説であるが何れの經論釋に依つたかを明かにしていないのである。

法然上人を「聖」人の字に當てている點から推しても、古德傳や弘願本に近い眞宗系の上人別傳を參考にして年代考證などに思いをいたさずして、室町中期になつて上人の門弟隆寛の名をかりて祕傳などと重量を加えて偽作した談義僧用の説話集と解すべきである。

2、法然上人祕傳遠流記 上下二卷(傳全集九一〇―九二八頁) 流布本は木版で一行二十字詰一面十行、本文ルビつきである。其の奥書に「黒谷上人遠流記者古來雖有其聞未刊行、然今幸得此正本、謹而閱之所闕於語燈繪詞之兩傳令於斯備記之故慶而行于梓之焉」とあり、尾題の下に「沙門行譽敬書」と誌している。

本文は上人が元久二年四月五日月輪殿にて頭光顯現の奇瑞のあつたことより筆を始め、そのあと直ぐ山門衆徒誣、流罪に筆を進め海上では上人が鬼神、唐人にあい四國に上陸して後も諸獸の送迎、餓鬼、鬼神、小蛇の出現に遭遇している。また遠く比叡山にあつては大猿の亂暴等、奇々怪々の記事が多い。是も談義僧の布教本であろうが、逸脱している度會が甚しいのである。

尙お上人の傳記について云えば、流罪に際して給つた選俗の名を「藤井の元彦」となし、還歸の際には「源の本

「彦」と變つてゐる。本彦は元彦の音通であらう。上人傳にあつて「藤井元彦」とするは四十八卷傳と正源名義抄と本傳、「源元彦」となつてゐるのは傳法繪、琳阿本、十卷傳の一連のものと九卷傳、十六門記と本傳の後の部とである。

怪奇譚の點では上掲の『十卷傳』や『法然上人祕傳』と脈絡があるようであるが、上人の行狀を敘述するに際し人間以外の怪奇談を多くとり入れて上人の徳望を高く評價せんとし、諸種の上人傳を参照したことはよく分るが、其れらを頭の中で一往整理もせず、蕪雜のままに記述したものとしかうけとれない。

3、正源名義抄 九卷 あり (傳全集八一五)。 卷五に「親鸞聖人御參の事」として聖人の吉水庵室入門、善信房綽空と改名し元久二年春には選擇集を授かり、次いで上人眞影に自筆の讀文を頂いたことを述べ、「專修念佛の祖師善信上人とまうすはこの親鸞聖人の御ことなり」とし、親鸞を法然上人の正統をつぐ念佛の祖としている。

尙お卷六には親鸞が上人に連坐して越後へ配されたことを記し、卷九の「親鸞聖人の御勅免の事」の條で勅免後の坂東教化、歸洛後の動靜を傳え教行信證など數十卷の著述を遺し弘長二年十一月廿八日殊勝の往生を遂げ諸國の遺弟報恩の誠をささげることの未曾有なるを記して本傳を結んでいる等、明かに眞宗門侶の手になることは明かである。

本傳卷四に「尾張法橋子餓鬼の事」や「上人蓮臺野へ御出の事」は此のあとの卷七「鬼神參事」卷八「鬼神往生の事」と共に怪奇なる譚で前掲の『遠流記』と聊か似通つてゐる。

今一つ上人配流の俗名を初め「藤井の元彦」(卷六)とし乍ら還歸の時に「源の元彦」と變つてゐる點も『遠流記』と共通である。

尙お本傳にある「耳四郎」の物語は古德傳と十卷傳とに記述するものであつて、此の點からも眞宗系であることを断定し得るものである。

『古德傳』などを依據とし怪奇譚を織り込んで上人を衆庶に親まれるように工夫して室町末につくられたものと考へらる。

4、法然上人惠月影 漆間徳定作（傳全集九二九—九六五頁）昭和元年十月大阪御靈神社境内の文樂座に於て人形淨瑠璃としてかかり、前古未曾有の人氣を博した際の台本である。漆間徳定氏は知恩院法教科長、大和吉野如意輪寺住職を経て上人誕生地の美作國誕生寺住職となり選まれて知恩院執事長をもつとむ。文才に長じ琵琶歌台本も著わしているが、上人を大衆に親しませる爲めに四十八卷傳を骨子にそこへ親鸞傳や東西本願寺を織り交ぜ創作したものであつて史書でなく文藝作品である。

5、其他 寺西聽學『戲曲法然上人』、三井晶史『創作法然』、須賀隆賢『全法然』、佐藤春夫『掬水譚』、同『極樂からきた』等あるもただ名を擧げるにとどめておこう。

（昭和三六・一・二五・稿了）

後篇 附錄

一、法然上人傳年表

- 一、 出生の若き五才の世に生れしなり。父、可成、母、可成の御妻なり。父、可成の御妻なり。
- 二、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 三、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 四、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 五、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 六、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 七、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 八、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 九、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 十、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 十一、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 十二、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 十三、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 十四、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 十五、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 十六、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 十七、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 十八、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 十九、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。
- 二十、 五才の年有母を失ひて其れを乞ふなり。母、可成の御妻なり。母、可成の御妻なり。

凡 附

凡 例

一九六

一、本年表は法然上人傳全集前篇本傳に集録する各種上人傳の記載事項を比較研究するに便なる事を主眼として編集した。
二、表現を簡略にし、上人が主語なる場合はそれを省略している。

三、傳全集に記載なきもので關連し參考となるべき事項は下の欄に採録した。

四、滅後にあつて追諡、勅會法要、上人傳編集並に出版、重要文化財指定など重要と覺ほしきものは力めて掲載した。

五、降誕年次を基礎とし元號（改元の月日はアラビア數字にて）、西曆を付記し研究の便に資した。

六、改元の年は新元號のみの表示となつてゐる。例せば承安五年春の淨土門に入るをすべて安元元年の下に收めてゐる。

七、出據の書名は次の如く略字を用いてゐる。上、下と數字はその書籍の卷數を示してゐる。

勅（勅修御傳・法然上人行狀繪圖・四十八卷傳）、近（近衛本・黑谷上人繪詞拔書）、九前（九卷傳の前部・法然上人繪詞卷第一）、九（九卷傳・法然上人傳記）、傳（傳法繪・本朝祖師傳記繪詞）、國華（國華掲載本・法然上人傳法繪流通）、高田（高田本・法然上人傳法繪下）、弘（弘願本・法然聖人繪）、琳（琳阿本・法然上人傳繪詞）、増（増上寺本・法然上人傳）、古（拾遺古德傳繪）、十（十卷傳・法然上人傳）、知（知恩傳）、私（源空聖人私日記）、醒（醒翻本・法然上人傳記）、黑（十六門記・黑谷上人傳）、秘（法然上人秘傳）、正（正源名義抄）、遠流（法然上人秘傳遠流記）、瑠（淨瑠璃本・法然上人惠月影）、玉（玉葉）、明月（明月記）、三長（三長記）、皇代略（皇代略記）、仁和寺（仁和寺御日次記）、立川寺（立川寺年代記）、皇帝（皇帝紀抄）、百（百練抄）、愚管（愚管抄）、念佛無間（念佛無間地獄抄）、教行（教行信證）、古今（古今著聞集）、平家（平家物語）、百因（私聚百因緣集）、元亨（元亨釋書）、源流（淨土法門源流章）、獅子（獅子伏象論）、十勝（淨土十勝節箋論）
翼贊（勅修円光大師行狀畫圖翼贊）、日鑑（知恩院日鑑）

9	5	3	2	1	前 1	降誕 年次
7 辛元治 10酉年	永治 丁三 巳年	保延 乙元 卯年	甲三 寅年	癸二 丑年	8 壬元承 1子年	千年 支號
1141	1137	1135	1134	1133	1132	西曆
<p>○三月四日 時國夜討にあう (十、一) ○三月十八日 〃 (正、一) ○三月十九日 時國四十三歳にて死す (正、一) ○三月 時國夜討 (瓊、二) ○春 時國夜討 (勅、一) (九、前) (傳、一) (弘、一) (琳、一) (古、一) (私、一) (黑、二) (百、因)</p>						<p>法然上人傳全集記載事項</p>
<p>○八月二十三日 賢運夢の告げうく (九、四上)</p> <p>○天下に疫病あり (十、一)</p> <p>○七月十四日 南無三寶と稱す (正、一)</p> <p>○缺日同 (傳、一) (知、上) (私) (百) (醍)</p> <p>○四月七日 秦氏男子を生む (勅、一) (近、上) (九、一上) (古、二) (弘、一) (琳、一) (十、一) (知、上) (黑、二) (祕、上) (正、二) (元亨) (獅)</p> <p>○七月上旬 秦氏夢に剃刀をのむ (黑、一)</p> <p>○七月十四日 秦氏夢に剃刀のむ (九、一上)</p> <p>○十二月七日 秦氏權化再誕の夢みる (祕、上)</p>						<p>關連參考事項</p> <p>○四月一日 大原良忍寂</p>
<p>○春 時國夜討 (源平盛衰記) ○三月十四日 定明、時國を襲う (祕)</p>						

15	14	13
丁卯年	丙寅年	久安元年 7・乙丑年 22
1147	1146	1145
<p>○春 時國終に臨み出家を遺命す(勅、一)</p> <p>○春日 夜討(元亨)(九、前)</p> <p>○冬の比 寛覺の弟子となる(十、一)</p> <p>○くれ 観覺の弟子となる(傳、一)(古、一)</p> <p>○歳末 観學の弟子となる(黒、三)</p> <p>○欠日 菩提寺院主観覺の弟子となる(勅、二)(私)(九、一上)(私)</p> <p>○十三歳にして比叡山にのぼる(古、二)(黒、四)(祕、上)</p> <p>○三月十三日 寛覺の小兒登山送状の事(十、一)</p> <p>○三月二十一日 美作をたつ(正、一)</p> <p>○観覺の小兒登嶺添状のこと(傳、二)(弘、一)(琳、二)(増、上)(私)(百因)</p> <p>○信空誕生(勅、四三)</p> <p>○二月十三日 つくり道にて法性寺殿にあう(勅、二)(九、前)(九、一上)</p> <p>○二月十三日 つくり道にて月輪殿にあう(祕、下)</p> <p>○二月十五日 源光のもとにつく(勅、三)</p> <p>○二月下旬 登壇受戒し善信圓明と號す(正、二)</p> <p>○春 寛覺母に小兒の登山のことを談すも許さず(十、一)</p> <p>○春の頃 十五歳にして延曆寺へ(九、前)(九、一上)</p> <p>○春 源光の室に入る(獅)</p>	<p>○七月十五日 観覺の門に入る(祕)</p> <p>○攝政忠通法性寺建立</p> <p>○九月 叡山に登る(祕)</p> <p>○十一月十二日 母秦氏死す(祕)</p>	

18	17	16		
庚午年	己巳年	戊辰年		
1150	1149	1148		
<p>○春 源光のもとへ遣わす途次月輪殿に參會す (古、一)</p> <p>○春比 小兒登山(十、一)</p> <p>○三月十五日 登山(勅、三)(九、一、下)</p> <p>○四月八日 皇圓の室に入る(勅、三)(九、一、下) (祕、下)</p> <p>○夏の頃 日吉社に詣ず(古、二)</p> <p>○十一月八日 戒壇院にて大乘戒うく(勅、三) (黒、五)</p> <p>○十一月 登壇授戒(傳、一)(琳、二)(増、下) (古、二)(十一、一)(祕、下)</p> <p>○十五歳にて登山、慈眼房につき授戒(醍)</p> <p>○功德院皇圓に投じ剃髮授戒(元亨)</p> <p>○春 本書(六十卷)を披りき勸學(勅、三)(九、一、下) (黒、五)(古、三)(琳、二)(十、一)</p> <p>○初春八日 皇圓の房にて圓教を極む(正、二)</p> <p>○天台六十卷を讀始む(私)</p> <p>○八月二十六日 黒谷叡空の室に入り法然房源空と號す(正、二)</p> <p>○九月十二日 慈眼房叡空に入室(勅、三)(九、一、下) (古、二)(琳、二)(黒、六)</p> <p>○九月十五日 同(十、一)</p> <p>○缺時 同(傳、二)(増、下)(教行)(著聞)</p>	<p>○隆寛生る</p> <p>○十二月十二日 母秦氏歿(誕生寺傳)</p> <p>○九條兼實生る(父は忠通、母は仲光の女)</p>			

26	25	24	23	21
戊寅年	丁丑年	保元 元 4 丙子 27年	久壽 乙亥 二年	仁平 癸酉 三年
1158	1157	1156	1155	1153
	<ul style="list-style-type: none"> ○三月四日 黒谷を出て嵯峨に參籠(正、二) ○三月十二日 南都藏後にあう(正、二) ○法蓮房信空十二歳にして寂空に入室(勅、四三)(十、二) ○春 信空、上人の最初の弟子となる(知、上) 	<ul style="list-style-type: none"> ○八月 皇圓入滅(知、上) ○夏比 嵯峨釋迦堂に參籠(知、上) ○缺時 同(古、二)(勅、四)(九、一下)(琳、三)(増、下)(十、二)(傳、一) ○九旬(或傳七日)の參籠畢つて黒谷に遷住(知、上) 	<ul style="list-style-type: none"> ○八月 皇圓入滅(知、上) ○秋 六十卷を披覽了(古、二)(琳、二)(十、一) ○師に請暇して遁世(私) ○往生業を修す(源流) 	<ul style="list-style-type: none"> ○眞觀房感西生る ○慈圓生る(忠通八男、兼實弟) ○眞慶生る ○七月 崇徳上皇御落飾、次で讃岐に遷幸
	<ul style="list-style-type: none"> ○關白忠通諸宗の碩學を集めて五十五カ日往生要集を講ぜしむる時に上人の講説最勝にして智惠第一の譽を得る(選擇之傳) 			

33	32	31	30	29	28	27
6 永 ・乙元萬 5 酉年	甲二 申年	3 長 ・癸元寬 29 未年	壬二 午年	9 應 ・辛元保 4 巳年	1 永 ・庚元曆 10 辰年	4 平 ・己元治 20 卯年
1165	1164	1163	1162	1161	1160	1159
<p>○三月 慶雅三論の聖教を讓渡す(正、二)</p> <p>○四月 法華三昧を修す(十、二)(知、上)</p> <p>○四月上旬 西黒谷にて一切經披覽(正、二)</p> <p>○始めて淨土教門に入る(百因)</p>	<p>○初冬 慶雅法橋にあう(正、二)</p>			<p>○四月 仁和寺(醍醐?) 寛雅にあい華嚴宗を學す(正、二)</p>		<p>○中河の上人にあい眞言の祕法傳受す(正、二)</p>
					<p>○二月 上西門院統子落飾</p>	
				<p>○五月六日 聖光房辨長生る(聖光傳)</p> <p>○六月 忠通法性寺にて出家す(震贊、五四)</p>		
				<p>○成覺房幸西生る(法水分流記)</p>		
						<p>○二月十九日 法性寺忠通薨(公卿補任)</p> <p>○八月 崇徳上皇讚岐に崩す</p> <p>○十二月十七日 後白河法皇蓮華王院三十三間堂を慶す</p>

41	40	39	38	37	36	35	34
癸三年 巳年	庚二年 寅年	4 辛元 21卯年 承安	庚二年 寅年	4 己元 8丑年 嘉應	戊三年 子年	丁二年 亥年	8 丙元 27戌年 仁安
1173	1172	1171	1170	1169	1168		1166
<p>○十一月 兼實右大臣に任ず(公卿補任) ○平清盛内大臣に任ず(公卿補任)</p> <p>○聖覺生る</p> <p>○俊乘房重源入宋(元亨釋書)</p> <p>○二月 平清盛太政大臣となる</p> <p>○聖光房出家、菩提寺妙法の室に入る(聖光傳)</p> <p>○二月 清盛出家</p> <p>○重源歸朝(元亨釋書)</p> <p>○六月十三日 皇圓櫻ヶ池に入り蛇身うく(翼賛)</p> <p>○九月十三日 聖光房明星寺に於て剃髮す(聖光傳)</p> <p>○十月 平清盛、兵庫輪田濱に經島を築く(皇代曆)</p> <p>○正月八日 高辨(明惠) 生る</p> <p>○四月一日 親鸞生る</p> <p>○眞觀房感西入室(勅、四八)</p> <p>○秋の比 華嚴經披覽の時に小蛇あらわる(十二)(知上)</p> <p>○顯眞大原に籠居(勅、一四)(九、二下)(十、三)(正、三)</p>							

45	44	42
8 治承 4 丁酉年	安元 丙申年	7 安元 28 乙未年
1177	1175	1174
<p>○高倉天皇に授戒(十、二)(知、上)</p> <p>○十月上旬 黒谷叡空に對面(正、三)</p>	<p>○春 黒谷を出て吉水へ(古、三)(弘、三)</p> <p>○黒谷を出て吉水へ(元亨)</p> <p>○淨土門に始めて入る(十、二)(知、七)</p> <p>○専修念佛及び圓戒を盛んに説く(元亨)</p> <p>○春 高倉天皇に一乘圓戒を授く(勅、一〇)(九、二上)</p> <p>○三月十四日 二祖對面(十、二)(知、上)</p> <p>○春 一向専修念佛門に入る(勅、六)(近、上)</p> <p>(黒、八)</p> <p>○四十二歳(安元元年)にして淨土門に入る(正、二)</p> <p>○四十三歳にして黒谷を出て吉水へ(九、二上)</p> <p>○四十三歳にして淨土門に入る(祕、下)</p> <p>○淨土門に始めて入る(私)</p> <p>○諸教所讀の文により念佛宗を開く(傳、一)(増、下)(國華)</p> <p>○善導疏により開宗(琳、三)</p> <p>○六萬遍日課念佛、其の後七萬遍の行者となる(黒、八)</p>	<p>○禪勝生る</p>
<p>○春 遠州櫻池に臨み皇圓に法施す(應聲院傳、翼贊三十)</p> <p>○十一月九日 證空生る</p>	<p>○春 聖光房登壇授戒</p>	<p>○禪勝生る</p>

51	50	49	48	47	46
癸卯年	壽永 5・壬元 27寅年	養和 7・辛元 14丑年	庚子年	己亥年	戊戌年
1183	1182	1181	1180	1179	1178
<p>○春 聖光房辨長延曆寺に登る(勅、四六)</p> <p>○三月 月輪殿出家、法名圓照(正、三)</p> <p>○七月 上西門院說戒(正、三)</p>			<p>○二月 叡空寂(正、三)</p> <p>○夏 上西門院にて說戒(十二、二)(知、上)</p> <p>○四月七日 二祖對面(正、二)</p> <p>○八月 津戸三郎武州より頼朝のところへ馳せま いる(九、三上)</p> <p>○津の戸三郎軍忠あり(勅、二八)(十、四)</p> <p>○十一月 法皇より勅使(正、三)</p> <p>○十二月十一日 東大寺炎上(傳、二)</p> <p>○十二月二十一日 東大寺炎上(十二、二) 平重衡南都を攻む(十、二)</p> <p>○十二月二十八日 平家東大寺をやく(勅、三〇) (黒、一〇)(古、三)(弘、二)(十二、二)(琳、三) (九、二上)</p>		
<p>○春 親鸞出家</p> <p>○六月 重源大勸進となり東大寺再興の宣下あり (東大寺緣起)</p>			<p>○十月三日 甘糟太郎大谷の庵室を訪ぬ(源平盛 衰記)</p> <p>○五月 重盛出家、法名證空</p> <p>○七月廿九日 重盛歿</p> <p>○五月 興福寺藏俊寂</p> <p>○六月 福原に遷都</p> <p>○十二月二十八日 平重衡興福寺も焼く</p>		
<p>○源智生る、父は備中守師盛</p>					

56	55	54	53	52
戊申年	丁未年	丙午年 8 乙元治 14巳年	4 甲元曆 16辰年	
1188	1187	1186	1184	
<p>○春 明遍天王寺西門を夢む(正、五) ○五月十五日 瀧山寺にて不斷常行念佛を始む</p>	<p>○正月十五日 顯眞大原勝林院にて不斷念佛を始む(勅、一四) ○十月 顯眞一向称名を相統せしむ(勅、一四) ○十二月 楊梅法橋頼秀の宿所にて別時念佛(正、四)</p>	<p>○の比 大原談義(私) ○秋 顯眞の招により大原に向う(勅、一四)(近、上)(古、四)(弘、三)(珠、三)(正、三) ○十二月二十八日 顯眞護摩堂の尼御前へ念佛勸進の消息遣す(勅、一四)</p>	<p>○二月七日 平重衡一の谷より都に上り上人より授戒念佛教導うく(勅、三〇)(九、二七)(十、二) ○九月 顯眞使を上人にたて面會を請う(勅、一四)(九、二下)</p>	<p>○(七月) 木曾義仲洛中亂入、一日聖教見ず(勅、五) ○(九月) 顯眞使を上人にたて面會を請う(勅、一四)(九、二下)</p>
<p>○兼實の嫡男良通薨、佛殿房臨終の戒師(玉)</p>	<p>○正月五日 隆信に院の昇殿を聽す(玉)</p>	<p>○三月廿三日 周防を東大寺造營所に充て重源に國務を管せしむ(玉、東鑑) ○四月十八日 造東大寺始(東大寺造立供養記) ○八月十八日 兼實恒例の念佛を修し戒を僧佛殿にうく(玉)</p>	<p>○三月 粉河寺にて維盛に授戒(源平盛衰記) ○十二月 覺明房長西生る ○義仲伏誅</p>	<p>○三月 頼朝東大寺造營を助く ○八月廿八日 大佛開眼供養、法皇臨幸(玉)</p>

58	57
建久 元久 庚辰年 4 11	己酉年 五 西
1190	1189
<ul style="list-style-type: none"> ○二月上旬 宣により院參(正,五) ○三月七日 顯真天台座主に(九,二下) ○五月廿八日 顯真權僧正に(九,二下) ○七月廿三日 兼實のため授戒,恒例念佛(玉) ○九月 靈山寺にて別時念佛(十,三)(知,上) ○秋 清水寺にて説戒(傳,二)(弘,三)(琳,四)(十,三)(知,上)(九,二下) ○清水寺にて念佛勸進(弘,三)(琳,四) ○十月六日 兼實に授戒(玉) ○十月下旬 五條坊門高倉の牛飼童往生(正,五) ○證空上人の室に入る(勅,四七)(九,三上) ○聖光房故郷に歸り油山の學頭に補す(勅,四六) 	<ul style="list-style-type: none"> ○八月十四日 後白河法皇の仙洞にて如法經の先達つとむ(勅,九) ○修明門院へ御參(正,五) ○の比 顯真大原に籠居(百因) ○二月十三日 大炊御門經宗出家(勅,一二)(十,五) ○二月二十八日 上人の念佛勸化により經宗往生(勅,一二)(十,五) ○八月一日 兼實に往生業を談ず(玉) ○八月八日 兼實に授戒,念佛(玉) ○修明院へ授戒(正,五)
<ul style="list-style-type: none"> ○二月一日 東大寺にて阿彌陀經を講ず(漢語燈錄) ○二月二日 同 觀經を講ず(漢語燈錄) ○十月十九日 東大寺棟上法皇御幸(玉) 	

10	23	33	60	10	20 59
四 平 五 平 五 平	六 平 六 平		壬 三 子 年	三 四 平 五	辛 二 亥 年
1192	1191	1191	1192	1191	1191

○春 後白河法皇に授戒(十、三)
 ○春 後白河法皇上人の眞影を寫さしむ(知、上)
 (十、三)
 ○夏の比 仁和寺法親王に授戒(十、三)(知、上)
 ○七月廿八日 兼實に授戒(玉)
 ○八月廿一日 兼實に授戒、念佛(玉)
 ○九月廿九日 中宮(宜秋門院)に授戒、授戒に
 效驗あり(玉)
 ○十月六日 兼實に授戒(玉)
 ○の比 東大寺大佛殿にて俊乗坊の請に應じ觀經
 淨土三部經を講じ淨土の五祖像の供養あり
 (勅、六)(九、二下)
 ○正月五日 後白河法皇御惱あり、上人を善知識
 と仰下さる(勅、一〇)
 ○二月二十六日 法皇に御授戒、御往生の儀式を
 定む(勅、一〇)
 ○三月十三日 法皇御往生(勅、一〇)(十、四)
 (知、上)(正、五)
 ○八月八日 兼實に授戒し念佛始む(玉)
 ○秋 後白河法皇の御爲に八坂引導寺にて念佛つ
 とむ(傳、二)(古、五)(琳、四)(十、四)(知、
 上)(九、二下)
 ○秋 大和入道具佛八坂引導寺にて六時禮讚を修
 す(勅、一〇)
 ○秋 大和入道嵯峨にて七日不斷念佛(弘、三)
 ○十一月十四日 顯眞法印寂(勅、一四)(九、二
 下)

○十月 兼實關白となる
 ○十一月 顯眞寂(華頂要略)
 ○十一月廿五日 熊谷直實久下と爭論し出家す

65	64	63	62	61
丁巳年	丙辰年	乙卯年	甲寅年	癸丑年
1197	1196	1195	1194	1193
<p>○三月二十日 兼實に授戒(玉)</p> <p>○春 熊谷入道お供して月輪殿へまいる(正、五)</p>	<p>○正月十五日 靈山にて如法念佛(弘、二)</p> <p>○二月十九日 兼實法性寺殿忌日に上人を推して上座となす(勅、一一)</p> <p>○夏 公胤淨土決疑抄を著わす(正、六)</p>	<p>○三月四日 津戸三郎入洛(九、三上)</p> <p>○三月十二日 俊乘房の東大寺造營供養のため天皇行幸、將軍參列(勅、四五)</p> <p>○三月二十一日 津戸三郎爲守將軍に供奉して上洛、上人に參じ但信稱名の行者となる(勅、二八)(九、三上)(十、四)</p> <p>○六月六日 俊乘房東大寺にて寂(勅、四五)</p> <p>○七月十三日 宜秋門院に授戒(三長記)</p> <p>○九月十八日 津戸三郎へ御返事(九、三上)</p> <p>○明通高野山へ隱遁(勅、一六)</p> <p>○源智十三歳にして入室(勅、四五)</p> <p>○宜秋門院に授戒(勅、四〇)</p>	<p>○十一月十五日 甘糟太郎上人に參ず(勅、二六)</p> <p>○冬のころ 官兵を遣し隆寛に安居導師營ましむ(勅、四四)</p> <p>○九月 後白河法皇一周忌の七日別行(正、五)</p>	<p>○十一月二十九日 慈圓天台座主に補す(東鑑)</p> <p>○聖光房、舍弟三明房の頓死を見て念佛門に入る</p> <p>○外記太夫師秀(安樂房父)の爲めに五十日逆修說法す(漢語燈錄)</p> <p>○三月十二日 重源大和尚位に叙(東大寺要錄)</p> <p>○〃〃 重源宣旨により傳燈大法師位をうく(法中補任)</p> <p>○五月廿四日 頼朝重源を京都に迎う(東鑑)</p> <p>○蓮生鎌倉に下り頼朝に厭欣の法を説く(東鑑)</p>

九年
戊午

1198

- 五月 聖光房吉水の禪室に參ず(勅、四六)(九、三下)(十、五)
- 上人聊か不進、月輪殿歎かる(勅、一一)
- 月輪殿より淨土の要文を集められたき旨の使あり(九、三七)(十、四)
- 初冬 月輪殿へ假名書の選擇集を呈す(正、五)
- 正月一日より草菴に閉籠り別時念佛を修し三昧發得(勅、七)(勅、一一)(九、三下)(古、五)
- (琳、五)(十、五)(醒、三昧記)
- 正月一日 一七日念佛を始め瑞相現ず(元亨)
- 正月四日 選擇集一卷をつくり聖光房に示す(琳、五)
- 選擇集を聖光房に授く(九、三下)(十、五)
- 正月 眞名の選擇集を月輪殿に呈す(正、五)
- 春 聖光房に選擇集を授く(勅、四六)
- 選擇集を月輪殿に呈す(黑、一一)(十、四)
- 二月一日 瑞相あり(元亨)
- 二月七日 元日より三十七カ日毎日七萬遍念佛不退(醒、三昧記)
- 二月十五日 眼根より赤袋出ず(十、五)
- 二月二十五日 眼根より佛出づ(醒、三昧記)(九、三下)
- 二月二十八日 左眼より光明放つ(醒、三昧記)
- 同日 病により念佛退き一萬或は二萬遍(十、四)
- 五月一日 夢中に善導來現(勅、一一)
- 八月 辨長、上人の命をうけて豫州に念佛す

○辛酉入室

○四月八日 東山吉水に於て歿後遺誠文を草す
(漢語燈錄)

68

67

庚二
申年

正治
4 己未年
27

1200

1199

- 二月 地想等の五觀現ず(九、三下)
- 閏二月六日 眞觀房感西四十八歳にて往生(勅、四八)
- 四月十二日 羅城門礎の事(九、四上)(十、五)
- 四月 俊乘房重源の召請にて南都へ(正、四)
- 九月三十日 兼實女房に授戒、其の驗あり(玉)(明月記)
- 十月一日 猶お兼實女房授戒(玉)
- 八月一日 本如く七萬遍念佛始む(醍、三昧記)(十、五)
- 九月二十二日 地想分明に現ず(醍、三昧記)(九、三下)(十、四)
- 九月二十三日 又分明に現ず(八)(九、三下)(十、五)
- 選擇集撰述(源流)
- 三昧發得ず(弘、二)
- 二月 辨長歸洛(勅、四六)
- 二月 地想等の五觀顯現(元亨)
- 二月の比々(醍、三昧記)(十、五)
- 八月 別時の間淨土依正現ず(九、三下)

- 十二月十九日 僧源空東寺の佛舍利を近江敏滿寺に送る(胡宮神社文書)
- 正月十三日 頼朝薨ず
- 正月 上野國大胡太郎實秀の妻に要文を送る(和語燈錄)
- 二月 聖光再び上洛(聖光傳)
- 七月廿七日 然阿良忠生る
- 八月八日 重源東大寺三月堂を修造(東大寺三月堂棟札)
- 九月廿六日 兼實法性寺の新第に赴く(明月)
- 兼實 證空を請じ選擇集を講ぜしむ(高僧傳)
- 五月十二日 幕府念佛を禁じ僧衣をうばい焼く(東鑑)
- 六月廿八日 中宮の院號を宜秋門院と定む(玉、猪隈關白記)

70	17	27	69
壬戌二年	三平交	建仁元年 辛酉	
1202	1201	1201	1201
<p>○十月廿八日午時 同(同)</p> <p>○二月廿一日 高島殿にて丈六佛面現隠(醜、三昧記)</p> <p>○同日 兼實に授戒、圓證と法名す(勅、一一)</p> <p>○正月廿八日 兼實法性寺月輪殿にて上人により出家(明月)</p> <p>○正月五日 勢至菩薩、丈六佛面現す(醜、三昧記)</p> <p>○隆信出家して戒心と號す(勅、一一)</p>	<p>○十二月廿八日 高島少將に謁す、丈六の佛面現す(十五)</p> <p>○十月十七日 女院(宜秋門院) 出家、上人戒師參勤(明月)</p> <p>○四月十九日 藤原宗貞夫妻堂舎建立の發願し上棟、翌春竣工(勅、一一)</p> <p>○春の頃 善信(親鸞)、上人に入室(古、六)</p> <p>○親鸞雜行を捨て本願に歸す(教行)</p>	<p>○十月二日 (玉)</p> <p>○秋 園田の太郎上人の庵室を訪ぬ(勅、二六)</p> <p>○冬 桓舜上人と聖道淨土を談す(正、六)</p> <p>○正月五日 丈六佛面現す(十、四)</p> <p>○正月五日 勢至菩薩現す(十、四) (醜、三昧記)</p> <p>○正月六日 青瑠璃地現す(十、四)</p> <p>○正月二十六日 青瑠璃地現す(醜、三昧記)</p> <p>○二月八日 鳥、琴、笛の音を聞く(十、四) (醜、三昧記)</p>	
<p>○廿二月廿五日 兼實、勢至菩薩の丈六佛面を現す(八)</p> <p>○廿二月廿五日 兼實、勢至菩薩の丈六佛面を現す(八)</p> <p>○廿二月廿五日 兼實、勢至菩薩の丈六佛面を現す(八)</p>	<p>○八月六日 兼實、勢至菩薩の丈六佛面を現す(八)</p> <p>○八月六日 兼實、勢至菩薩の丈六佛面を現す(八)</p> <p>○八月六日 兼實、勢至菩薩の丈六佛面を現す(八)</p>	<p>○二月十八日 慈圓天台座主重補</p> <p>○長西入室</p> <p>○三月十八日 兼實、勢至菩薩の丈六佛面を現す(八)</p> <p>○三月十八日 兼實、勢至菩薩の丈六佛面を現す(八)</p> <p>○三月十八日 兼實、勢至菩薩の丈六佛面を現す(八)</p>	

72	71	67
元久 甲子 20	三年 癸亥	三年 癸亥
1204	1203	1202
<p>○三月十六日 慈眼房は授戒の師範、衣食の扶持と追憶(勅、一三)</p> <p>○秋の頃 雲居寺の勝應彌陀院へ百日參詣(勅、一三)</p> <p>○八月晦日 宗貞の特請に應じ不斷念佛を始行し一字建立、引接寺と號す(勅、一三)</p> <p>○九月十九日 弘法大師の十住心論を談議す(勅、五)</p> <p>○十二月廿八日 阿彌陀佛面現す(十、四)(醍、三昧記)</p> <p>○春 親鸞(綽空)入室(十、六)</p> <p>○十一月十五日 甘糟太郎八王子へ追討(九、五上)</p> <p>○冬 甘糟太郎八王子へ行く(十、六)</p> <p>○正月廿五日 丈六の佛面現す(九、三下)</p> <p>○正月廿八日 青瑠璃地現す(九、三下)</p> <p>○二月八日 鳥、琴、笛の音きく(九、三下)</p> <p>○二月二十二日 隆信端坐合掌往生(勅、一二)(十、五)</p> <p>○三月 範宴入室(正、五)</p> <p>○三月 後白河法皇十三回忌佛事に六時禮讀を勤行す(勅、一〇)</p> <p>○三月十四日 隆寛に選擇集授與(勅、四四)(九、五上)</p> <p>○春 選擇集撰述(古、六)(知、上)</p> <p>○四月五日 頭光現わる(知、下)</p>	<p>○八月六日 澄憲(聖覺の父)寂</p> <p>○俊乘房、南無阿彌陀佛作善集を作る(年八十三)</p> <p>○二月十七日 伊豆山源延に淨土略要文を授く(漢語燈錄)</p> <p>○三月二十六日 隆寛、選擇集を上人に返す(明義進行集)</p>	<p>○八月 貞慶、招提寺に念佛道場を建つ</p> <p>○十二月廿五日 重源、伊賀に新大佛寺を建つ</p> <p>○覺明房長西入門(翼賛五八)</p>

乙丑年

1205

- 五月十三日 蓮生(熊谷) 鳥羽にて上品上生の
來迎を願う(勅、二七)
- 七月 隆寛に選擇集授與(十、六)
- 八月 辨長吉水の禪室を辭す(勅、四六)
- 八月 瘡病祈請のこと(近)
- 十月十五日 山門念佛停止のため衆徒蜂起す
(正、五)
- 十月の比々(九、五七)
- 十月 七ヶ條の起請(正、五)
- 十一月三日 山門へ起請文かく(十、六)(九、
五上)
- 十一月七日 七ヶ條起請文(二尊院文書)(傳、
二)(勅、三一)(古、六)(高田、下)(弘、三)
(九、五上)
- 十一月七日 山門へ起請文(十、六)(知、下)
- 十一月七日 兼實、大僧正へ消息(十、六)
- 十一月十三日 山門へ起請文かく(古、五)(琳、
五)
- 同日 兼實、比叡大僧正へ消息(古、五)(勅、
三)(九、五上)(琳、五)
- 仲冬 山門念佛停止を訴申す(古、五)(琳、五)
- 冬々(勅、三二)(十、六)
- 冬 西仙房心寂往生(勅、四三)
- 正月一日 靈山寺にて別時念佛始む、勢至菩薩
列にたつ(勅、八)
- 正月二十一日 尼女房たちに授戒(勅、二四)
- 三月 辨長、度脫房をもて上人に二箇の疑問を

- 質す(勅、四六)(九、三下)(十、五)
 ○三月 山門騒動して上人の流罪をせまる(正、六)
 ○春 親鸞に選擇集授く(正、五)
 ○四月一日 月輪殿にて頭光現す(傳、二)(古今)(黒、一二)
 ○四月五日 〃 (勅、八)(九、五下)(高田、下)(弘、四)(琳、六)(十、七)(遠、上)
 ○四月十四日 親鸞、上人の眞影をうく(十六、六) 〃 二十八日 〃 (正、五)
 ○四月十四日 親鸞に選擇集傳授(教行)
 ○〃日 釋綽空の字を善信に授く(古、六)
 ○缺日 親鸞に選擇集書寫許さる(古、六)(十、六)
 ○閏七月二十九日 親鸞に眞影の銘と善信の號を授く(教行)(古、六)
 ○八月 瘡病を患う(勅、一七)(十、七)
 ○〃 地想觀現す(九、三下)
 ○〃 月輪殿聖覺を召し上人の瘡病祈請(勅、一七)(九、五下)
 ○九月 興福寺衆徒蜂起して訴う(勅、三一)
 ○秋 津戸三郎念佛所建立(九、四下)
 ○秋 津戸三郎飛脚をもて念佛を尋ぬ(勅、二八)
 ○十月十八日 津戸へ御返事(九、四下)
 ○十二月八日 作歌の奥書(勅、三〇)
 ○十二月廿八日 高島少將に對面、丈六の佛面現す(九、三下)
 ○十二月廿九日 宣旨を下して上人の過となさず

- 熊谷蓮生、西郊の菴を幸阿に附し武州に歸る(光明寺縁起)
 ○武藏國に熊谷寺建つ

建永
4・丙寅年
27寅年

(勅、三一)
○蘭田太郎成家本國に下向して家子郎従を教導す
(勅、二六)

○正月四日 三尊現す(醍、三昧記)(高田、下)

(九、三下)(元亨)

○正月五日 〃(醍、三昧記)(高田、下)

○正月八日 三尊現す(十、四)

○二月十四日 興福寺の申出により法々、安樂を

召出さる(三長)

○二月二十日 興福寺衆徒念佛宗の事を訴申す

(三長)

○二月三十日 法本房、安樂房、念佛弘通により

罪名勘えらる(三長)

○三月七日 後の京極殿薨去(勅、三三)(近、下)

(九、六上)(十、八)(知、下)

○三月十八日 流罪のため御房を出づ(正、六)

○四月二十五日 實朝津戸三郎を召して一向專修

の事を問い、專修を許す(勅、二八)

○四月二十八日 津戸三郎は淨勝房、唯願房等と

念佛許さる(勅、二八)

○五月二十七日 念佛宗宣下のこと(三長)

○六月十三日 念佛宗のことを長兼兼實に言上す

(三長)

○六月十九日 興福寺衆徒の上奏により上皇、專

修念佛の宣旨のこと(三長)

○六月廿一日 興福寺衆徒より專修念佛門弟等が

諸宗誹謗の訴により宣下すべきか(三長)

○二月十六、七日 擴政良經以下諸卿念佛宗停止
の口宣について評定

○二月十九日 三條長兼念佛口宣について貞慶に

問う

○二月二十一日 興福寺念佛宗宣下につき強訴

○六月四日 俊乘房寂(明月記)

10 承元
・丁元
25卯年

1207

- 六月二十六日 念佛宗宣下のこと(三長)
- 六月廿八日 專修念佛の人々申狀を御所に留らる(三長)
- 七月 吉水をいで小松殿にて明月の詠歌(傳、二)(高田、下)(弘、四)(琳、六)
- 七月 隆寛に小松殿にて選擇集授く(傳、二)(弘、四)(琳、六)
- 八月五日 興福寺より念佛宗宣旨を早く沙汰の申出あり(三長)
- 八月 熊谷蓮生、來年往生を豫告す(勅、二七)(九、四下)(十、三)
- 九月四日 熊谷蓮生往生(九、四下)
- 十一月二十七日 大宮實宗出家、上人より授戒(勅、一二)(明月)
- 聖覺を執筆として登山狀を送る(勅、三三)
- 十二月九日 後鳥羽院熊野御幸(勅、三三)
- 〃 住蓮安樂等東山鹿谷にて別時念佛、六時禮讃をつとむ、聽衆多く集まる、就中御所の女房出家の事あり(勅、三三)
- 正月廿四日 專修念佛停止の宣下のこと(明月)
- 二月上旬 南北の學徒、上人を罰すべしと訴う(古、七)
- 〃 安樂、住蓮勿らる(念佛無間)
- 〃 念佛門徒死罪、流罪(教行)
- 二月九日 住蓮、安樂死罪(勅、三三)
- 〃 一向專修のもの搦め取らる(明月)
- 〃 住蓮、安樂に罪科(勅、三三)

- 二月十日 兼實、專修僧のことを案す(明月)
- 二月 念佛の行人に宣旨下る(九、六上)
- 缺日 門弟等流罪の事(知、下)
- 二月 讃州へ流さる(元亨)
- 二月十八日 土佐に配流(皇帝紀)
- 二月廿七日 配流す(高田、下)(琳、七)(遠、下)
- 〃〃 選俗の姓名うく(傳、三)(國華、下)(琳、六)(九、六上)(黑、一三)(遠、上)
- 二月廿八日 土佐へ配流、門弟等擲取らる(皇帝紀)
- 〃〃 一向專修の源空已下罪科(皇年代)
- 〃〃 上人配流、住蓮安樂死罪のこと(皇代曆)
- 〃〃 遠流の宣旨下る(勅、三三)(十、八)(十、九)
- 三月 上人流罪(立川寺年代記)
- 三月上旬 法性寺小御堂に逗留(古、七)
- 三月十五日 民部卿範光出家、法名靜心(勅、一二)
- 三月十六日 都を出づ(勅、三四)(黑、一三)(傳、三)(古、七)(國華、下)(琳、六)(知、下)(十、八)
- 〃〃 高階入道館に入る(國華、下)
- 三月十七日 經島につく(知、下)
- 三月十八日 都を出づよし披露(正、六)
- 〃〃 葦屋浦、經島につく(十、八)
- 〃〃 室につく(知、下)

○親鸞を越後に流す

○三月 後鳥羽上皇高野山に幸す

二
戌辰年

1208

- 三月廿一日 經島船出(十、八)
 ○三月廿二日 高瀬奥に船かかる(十、八)
 ○三月廿三日 夜都を出づる由披露(正、六)
 ○三月廿六日 高階入道館に入る(傳、三)(高田、下)(弘、四)(琳、七)(十、八)(知下)(勅、三五)(九、六下)
 ○三月廿七日 遠流のことあり(弘、四)
 ○〃〃 經島逗留(十、八)
 ○四月三日 善通寺に詣る(十、八)
 ○四月五日 兼實薨す(勅、三五)(愚管抄)
 ○四月十一日 住房を出づ(正、六)
 ○五月五日 兼實往生(正、八)
 ○六月十九日 一念義につき京都へ御返事(十、九)
 ○六月廿三日 聖覺より越後の邪義を訴う(琳、七)
 ○七月十四日 津戸三郎書狀を讃岐に送る(勅、三五)
 ○八月廿一日 上人より津戸三郎へ返簡(勅、三五)(十、八)
 ○八月廿四日 〃(九、六下)(十、九)
 ○八月 勅免の宣下(傳、三)(國華、下)(九、七上)(黑、一四)
 ○九月四日 熊谷蓮生寂(勅、二七)(十、三)
 ○十二月八日 勅免の宣下(勅、三六)
- 八月 支度の道場へ(清福寺にて越年)(正、八)
 ○十月 善通寺に詣ず(遠、下)

○九月 高辨東大寺尊勝院學頭となる

79	78	77
3 辛未 元 建曆	庚午 四年	己巳 三年
1211	1210	1209
<p>○正月廿一日 善導大師大谷寺に化來し一乘戒法等を上人に授く(獅子)</p> <p>○夏の頃 後鳥羽上皇八幡宮御幸、倡妓横して云う(勅、三六)(近、下)(十、九)</p> <p>○七月比 後鳥羽院蓮華王院にて御夢想あり(知、下)</p>	<p>○七月二日 坂本の猿二、三十東塔に登る(正、八)</p> <p>○八月 勅免の宣旨(正、八)</p> <p>○〃 親鸞勅免のこと(正、九)</p> <p>○九月廿五日 讃州を立つ(正、八)</p> <p>○十月四日 兵庫につく(正、八)</p> <p>○十月十日 勝尾寺へ(正、八)</p>	<p>○十一月八日 宇都宮彌三郎上人を勝尾の草庵に訪ね入道、實信房蓮生と號す(勅、二六)</p> <p>○勝尾寺大衆に法服十五具を施入、また一切經を施入し開題供養す(勅、三六)</p> <p>○六月八日 大猿八匹比叡山に登る(遠、下)</p> <p>○六月十九日 光明房の狀により一念義停止の起請文を定む(勅、二九)(九、六下)(琳、七)(十、九)</p> <p>○夏の比 配所にて一念義停止の御狀(九、六下)</p> <p>○六月廿三日 聖覺邪教をいましむの書狀(琳、七)</p> <p>○八月 勅免の宣旨(琳、七)(遠、下)</p> <p>○〃 歸洛(立川寺年代記)</p> <p>○八月の比 勝尾山にうつる(古、八)</p>
<p>○十一月廿一日 善導大師大谷寺に化來し一乘戒法等を上人に授く(獅子)</p>	<p>○七月二日 坂本の猿二、三十東塔に登る(正、八)</p> <p>○八月 勅免の宣旨(正、八)</p> <p>○〃 親鸞勅免のこと(正、九)</p> <p>○九月廿五日 讃州を立つ(正、八)</p> <p>○十月四日 兵庫につく(正、八)</p> <p>○十月十日 勝尾寺へ(正、八)</p>	<p>○十一月八日 宇都宮彌三郎上人を勝尾の草庵に訪ね入道、實信房蓮生と號す(勅、二六)</p> <p>○勝尾寺大衆に法服十五具を施入、また一切經を施入し開題供養す(勅、三六)</p> <p>○六月八日 大猿八匹比叡山に登る(遠、下)</p> <p>○六月十九日 光明房の狀により一念義停止の起請文を定む(勅、二九)(九、六下)(琳、七)(十、九)</p> <p>○夏の比 配所にて一念義停止の御狀(九、六下)</p> <p>○六月廿三日 聖覺邪教をいましむの書狀(琳、七)</p> <p>○八月 勅免の宣旨(琳、七)(遠、下)</p> <p>○〃 歸洛(立川寺年代記)</p> <p>○八月の比 勝尾山にうつる(古、八)</p>

壬二年
申

1212

- 同 比 上皇御夢想、光親上人の還歸を奏す
(勅、三七)(近、下)
- 八月 かえりの勅免(高田、下)(古、八)(弘、四)
- 八月八日 〃 (十、九)
- 十一月七日 勅免入洛(教行)
- 十一月十七日 入洛宣旨(醍、臨終記)
- 〃 〃 選歸の宣下(勅、三七)(近、下)
- 〃 〃 京洛に歸還(古、八)(十、九)
- 〃 (醍、臨終記)(九、七上)
- 十一月二十日 歸還の院宣あり(琳、八)
- 〃 〃 歸浴(勅、三七)(私)(正、九)
- 〃 〃 慈鎮和尚の沙汰として大谷の禪
- 〃 〃 房に住居(勅、三六)(十、九)
- 〃 〃 大谷に住居(九、七上)(醍、臨終記)
- 十一月廿三日 月輪北の政所に對面(正、八)
- 十二月七日 參内(正、八)
- 十二月十二日 帝都に歸る(黑、一四)
- 缺月日 詔により都に歸る(元亨)
- 正月一日 老病(琳、八)
- 〃 〃 風氣のこち(正、九)
- 正月二日 老病不食(傳、四)(勅、三七)(九、七下)(黑、一四)(醍、臨終記)(古、八)(十、九)
- 正月三日 我本極樂にあり云々(醍、臨終記)
- 〃 〃 老病、高聲不退(私)
- 〃 〃 決定往生を論ず(勅、三七)(九、七下)(古、八)(十、九)

○十一月上旬 臨終行儀を製す(沼津、乘運寺藏)

○十一月下旬 門人選擇集を鏤刻せんとし序を基親に造らしむ(翼贊、五四)

○正月十一日 高聲念佛を人に勸む(勅、三七)
(九、七下) (傳、四) (古、八) (琳、八) (十、九)
(百因) (醍、臨終記)

○〃〃 極樂莊嚴、佛菩薩の眞身を拜すと
述懐(勅、三七) (私)

○正月十二日 高聲念佛(正、八)

○正月十九日 薄師眞清夢に往生雲を見る(十、
一〇)

○正月二十日 老病の上に不食増す(高田、下)

○〃〃 紫雲あり(私) (古、八) (勅、三七)
(九、七下) (琳、八) (十、九) (正、九) (醍、臨
終記) (百因)

○〃〃 念佛高聲(傳、四)

○〃〃 紫雲坊の上に垂布(九、七下) (私)

○正月廿二日 貴女來臨(九、七下) (十、九)
一枚起請文のこと(九、七下)

○缺日 貴女來臨(勅、四五)

○正月廿三日 高聲不退(琳、八) (勅、三七)
紫雲(醍、臨終記) (九、七下) (私
(百因)

○〃〃 諸人往生の奇瑞を感得(勅、三八)

○正月廿四日 念佛しきり(勅、三七) (正、九)
(傳、四) (古、八) (琳、八) (古今著聞) (黒、
一四) (高田、下) (醍、臨終記)

○〃〃 紫雲(醍、臨終記) (勅、三七) (九、
七下) (私) (百因)

○正月廿五日 念佛高聲無間(古、八) (勅、三七)
(黒、一四) (琳、八) (醍、臨終記)

○正月十六日 慈圓天台座主重補

○正月廿三日 遺訓一枚起請文を源智に授く(黒
谷金戒光明寺文書)

建保元年
癸酉年
12
甲二
戌年

1214

1213

- 〃〃 往生(私)(教行)(傳、四)(古、八)(國華、下)(勅三七)(九、七下)(琳、八)(黑、一四)(十、九)(正、九)(元亨)(百因)(醍、臨終記)(獅子)(仁和寺日次記)(古今著聞集——但し建曆三年と誤記)
- 〃〃 諸人往生の奇瑞を感得(勅、三八)
- 〃〃 諸人夢に往生を知る(高田、下)(九、七下)
- 正月 往生(立川寺年代記)
- 缺日 入滅(源流)
- 正月廿七日 土葬(正、九)
- 法蓮信空、世俗に准じ七七日法事を修す(勅、三九)
- 二月二日 大宮實宗の初七日敬白文(十、一〇)
- 二月三日 栗田口の禪尼夢に墳墓に參る(古、九)
- 二月十三日 〃(勅、三八)(近、下)
- 二月二十日 廟墳を點し穴を掘る(九、七下)
- 三月比 信實御影を寫す(知、下)
- 四月六日 慈圓六七日の敬白願文(十、一〇)
- 四月十四日 信空の七七日敬白文(十、一〇)
- 十二月八日 大宮實宗往生(勅、一二)
- 一向專修停止の沙汰(勅、四二)(近、下)
- 正月 聖覺眞如堂にて第三年忌を營む(勅、一七)

- 九月八日 信空の力により選擇集開板なる(建曆本)
- 十一月廿三日 高辨摧邪輪を撰す
- 二月三日 笠置貞慶寂
- 六月廿二日 高辨摧邪輪莊嚴記を撰す
- 十一月十九日 慈圓天台座主重補

88	87	85	84	83
庚辰二年	承久元年 4・12卯年	丁丑五年	丙子四年	乙亥三年
1220	1219	1217	1216	1215
<p>○四月八日 航空、九旬の間持齋念佛(傳、四)</p>	<p>○正月 右大臣實朝薨逝し、津戸三郎出家を遂ぐ (勅、二八)(九、九下)(十、七)</p>	<p>○閏六月廿日 公胤往生(傳、四)(古、九)(勅、四〇)(九、八下)(琳、九)(十、一〇)</p>	<p>○四月廿六日 公胤夢に上人の告をうく(古、九)(勅、四)(九、八下)(十、一〇)(知、下)(古、今著聞)</p>	<p>○隨蓮夢に上人より往生を聞く(九、八下)</p>
<p>○三月廿三日 心圓、選擇集を講ず(玉葉)</p> <p>○愚管抄成る</p>	<p>○閏二月四日 專修念佛を禁す</p>	<p>○三月 空阿彌陀佛四十八日の念佛會を修す、偶ま延曆寺僧徒蜂起の風聞あり、爲めに念佛衆逃散す</p> <p>○三月廿五日 金光房奥州に寂(鎮西傳)</p> <p>○是夏 證空、御室の藏中より般若舟讀を發見し流す(和漢高祖傳中)</p>	<p>○正月十日 廿五日まで勢觀房西福寺に於て別時念佛を修す(西福寺本會後背銘)</p> <p>○二月 隆寛、具三心義二卷を撰す(金澤文庫藏)</p> <p>○三月廿三日 吉水坊焼く(門葉記)</p> <p>○然阿良忠 大聖竹林寺記を讀み忽ち聖道を捨て淨土に歸す</p>	<p>○十一月 然阿良忠雜髮授戒</p> <p>○五月廿八日 平基親覽</p> <p>○秋 勢觀房源智西福寺に住す(翼贊、西福寺文書)</p>

94	93	92	90	89
丙二 戌年	4 嘉 乙元 祿 20 四年	11 元 甲元 仁 20 申年	4 貞 壬元 應 13 年	辛三 巳年
1226	1225	1224	1222	1221
<p>○正月十五日 後鳥羽院隠岐より散心念佛一定出 離と仰せあり(勅、一七)(勅、四一)</p> <p>○六月廿三日 所司專當大谷へ發向す(正、九)</p> <p>○八月五日 隆寛配所へ下る(正、九)</p> <p>○十二月八日 安貞と改元(誤り)(正、九)</p>	<p>○一向專修停止の勅下る(勅、四二)(近、下)</p>	<p>○正月一日 航空大谷の修正に詣る(傳、四)</p> <p>○四月二十日 靜遍往生(勅、四〇)(九、八下)</p> <p>○六月十六日 明遍寂(勅、一六)</p> <p>○八月三日 定生房往生(傳、四)</p> <p>○八月五日 定佛を房主となす(傳、四)</p> <p>○九月廿五日 善光寺房生の和歌(傳、四)</p>	<p>○二月廿三日 念佛房嵯峨釋迦堂造營(勅、四八)</p> <p>○一向專修停止の勅下る(勅、四二)(近、下)</p>	<p>○四月八日 航空七月十五日まで毎日十萬遍念佛 (傳、四)</p> <p>○七月十三日 後鳥羽上皇隠岐に遷さる(知、下)</p> <p>○缺日 君隠岐へ(高田、下)</p> <p>○の比 聖覺但馬宮に念佛用心をとく(勅、一七)</p> <p>○隆寛、但馬宮に念佛往生のことくわしく 申おくる(勅、四五)</p>
<p>○七月 鎌倉二位禪尼政子薨す</p> <p>○九月廿五日 慈圓寂す</p>	<p>○八月五日 專修念佛を禁ず(歴代皇紀)</p> <p>○延暦、興福兩寺の奏聞により選擇集の板木を取 上げ大講堂の前にて焼毀す(安國論)</p> <p>○親鸞、常陸稻田に於て教行信證文類を作り一向 宗を開く</p>	<p>○二月 日蓮生る</p>	<p>○七月十三日 北條義時三帝二親王を選す</p> <p>○八月 聖覺、唯信鈔を著す</p> <p>○十二月 證空三鉢寺に不斷念佛を始む</p>	

安貞
元年
12
亥年
10

- 正月三十日 野宮公繼往生(勅、一二)
- 並覆定照、憤り隆寛、幸西を流刑し大谷の墳墓を破却せんと貫首に訴う(勅、四二)
- 六月十二日 山門の使者廟堂をこぼつ(古、九)
- 六月廿一日 大谷廟堂をこぼち棄つべき沙汰(傳、四)(琳、九)
- 六月廿二日 勅許ありて廟堂を破却せんとす(勅、四二)(九、九上)(十、一〇)
- 〃〃 法蓮房、覺阿、妙香院良快等改葬を議し移す(勅、四二)
- 六月廿三日 念佛行人千餘騎、移葬に隨う(傳、四)
- 六月廿四日 大谷の墓所を破却(百鍊鈔)
- 六月廿七日 山門僧墓堂を破壊し武家制止す(明月)
- 六月三十日 念佛者追放の訴訟(十、一〇)(知、下)
- 夏の比 顯密衆徒念佛停廢せんとす(古、九)(九、九上)
- 七月五日 隆寛、空阿、成覺配流(百鍊抄)
- 〃〃 隆寛、配所へ進發(勅、四四)(九、九上)(十、一〇)
- 八月一日 隆寛、鎌倉をたつ(勅、四四)(九、九上)(十、一〇)
- 十二月上旬 黒谷源空上人傳(聖覺記)の序文(黒、一)
- 十二月十三日 隆寛寂(勅、四四)(九、九上)(十、一〇)

○十月 延曆寺僧綱念佛停廢の事を訴う

<p>101 4 天福 ・癸元 15巳年</p>	<p>100 4 貞永 ・壬元 2辰年</p>	<p>99 辛三 卯年</p>	<p>97 3 寛喜 ・己元 5丑年</p>	<p>96 二年 戊子</p>
<p>1233</p>	<p>1232</p>	<p>1231</p>	<p>1229</p>	<p>1228</p>
<p>○選擇集並に印板焼かる(念佛無間) ○金光房、陸奥に下向(勅、四八)</p> <p>○正月十五日 法性寺空阿往生(勅、四八)(九、九下) ○正月廿五日 遺骸を廣隆寺より粟生へ移す(九、九下) ○(正、九) 粟生にて茶毘(勅、四二)(十、一) ○六月廿一日 山門念佛停廢の僉議(黑、一六) ○九月九日 法蓮房信空寂(勅、四三) ○冬 聖光房、肥後往生院にて別時念佛を修し、末代念佛授手印を製す(勅、四六) ○聖光房、筑後高良山麓の厨寺にて一千日の如法念佛始む(勅、四六)</p>				
<p>○十一月十一日 土御門上皇阿波に崩す</p> <p>○正月 高辨寂 ○三月 然阿良忠、石州多陀寺に住し不斷念佛を修す</p> <p>○七月廿四日 幕府念佛宗黑衣僧の都鄙往來禁止を奏請す(東鑑)</p> <p>○七月廿一日 覺明房寂(翼贊、五八)</p>				

106	105	103	102	
11 曆 戊元仁 22 戌年	丁三 酉年	丙二 申年	9 嘉 乙元禎 19 未年	11 文天 甲元曆 5 午年 福二
1238	1237	1235	1234	
○二月廿九日 聖光房辨長寂(勅、四六) ○閏二月廿九日 〃(九、三下) ○十二月十二日 源智賀茂神宮堂にて寂(勅、四五)	○五月 傳法繪流通四巻をつくり始む(傳、四) ○九月廿一日 勢觀房源智より聖光房へ返狀(勅、四六)(九、三下) ○十一月廿五日 傳法繪流通四巻成る(傳、二)(傳、四)	○二月二日 道家(兼實の孫)阿彌陀經十萬卷摺寫供養す(勅、三五) ○三月五日 聖覺寂(勅、一七)	○九月三日 善惠房、津戸三郎へ返狀(九、三上) ○九月十四日 源弘、夢に善惠房の十一面觀音化身と見る(勅、四七) ○十月十二日 善惠房、重ねて津戸へ返狀(九、三上) ○善惠房津戸三郎へさとす(九、三上) ○善惠房と津戸三郎と念佛問答(勅、四七)	
○聖光房の遺言に基き遺弟遺骨を二尊院に納む(糶鈔)	○正月 敬西房信瑞三部經音義四巻、法然上人傳等を著す(糸譜下) ○九月八日 然阿良忠、筑後上妻天福寺にて始めて聖光房に謁す(然阿傳)	○勢觀房鎮西より歸洛し大谷の舊房を再興す(翼贊、五二) ○六月三十日 宣旨を下し専修念佛を禁ぜしむ(翼贊、四二) ○四條天皇 華頂尊者の諡號を賜ふ		

112	111	110	109	108	107
甲辰年 2 癸卯年 26	寬元 元 26	三寅年 壬寅	辛丑年 辛丑	仁治 元 7 戊子年 16	延應 元 2 己亥年 7
1244	1243	1242	1241	1240	1239
○三月二日 西蓮往生(勅、四三)	○正月十五日 津戸三郎往生(勅、二八)(九、九下)(十、七) ○秋 西蓮、遠江横路に下向(勅、四三) ○の頃 西明寺禪門念佛の安心を園田智明に尋ぬ(勅、二六)	○五月二日 毘沙門堂明禪、正信房を善知識として往生(勅、四一) ○十月廿八日 津戸三郎三七日の如法念佛を始む(勅、二八) ○十一月十八日 津戸三郎腹を切る(九、九下)(十、七)	○十一月廿二日 宇都宮蓮生、佛の來迎を夢みる(勅、二六)	○一向專修停止の勅下る(勅、四二)(近、下)	○二月 後鳥羽上皇隱岐に崩す ○二月十五日 一遍生る ○三月六日 選擇集刪本を刊行す ○十月 日蓮出家 ○二月 然阿良忠、鎌倉悟眞寺に入る ○五月 山徒祇園神人をして念佛を停止せしむ(日蓮遺文錄)
○正月十日 天皇大谷禪房に臨幸し通明國師の號を賜う(獅子)		○十二月七日 妙香院良快寂			

127	126	124	121	119	116	115	114
3 正元 ・己元 26未年	正嘉 戊二年 午年	10 康元 ・丙元 5辰年	癸五 丑年	建長 辛三年 亥年	戊二 申年	2 寶治 ・丁元 28未年	丙四 午年
1259	1258	1256	1253	1251	1248	1247	1246
○十一月十二日 證空往生(九、七上) 〃〃〃 宇都宮蓮生往生(勅、二六)	○十月四日 禪勝房往生(勅、四五)(九、四下)	○七月廿七日 湛空寂(勅、四三)	○七月三日 乘願房往生(勅、四四) ○十一月三日 念佛房往生(勅、四八)	○九月十六日 藺田太郎往生(勅、二六)	○十一月廿六日 證空寂(勅、四七)(九、三上) (十、三)	○四月十四日 幸西寂	○大胡太郎實秀往生(勅、二五)
		○八月 敬西房信瑞、廣疑瑞決集を著す建長八年とあり(大正二年發見し出版) ○十月十四日 親鸞、西方指南抄を書く	○四月 日蓮始めて法華題目を唱う	○七月 選擇集開版、願主入阿彌陀佛(建長版)			

151	147	144	142	140	139	131	130	
癸未年	弘安二年 己卯年	建治二年 丙子年	十一年 甲戌年	壬九年	2 文永元年 甲子年 28子	癸亥年	弘長二年 壬戌年	
		1276	1274		1264	1263	1262	
					○五月一日 相模四郎出家(勅、四五)(九、九上) ○五月三日 〃 往生(勅、四五)(九、九上) ○の頃 然阿良忠と蓮寂房と兩流校合す(勅、四六)	○十一月廿二日 西明寺禪門時頼往生(勅、二二) ○十二月十五日 諫方の蓮佛時頼の往生を信瑞に 報知す(勅、二六)	○十一月廿八日 親鸞寂(十、六)(正、九) ○の頃 敬西房信瑞、上人傳をつくり西明寺禪門 (北條時頼)へ進す(勅、二六)	
	○十月 敬西房信瑞寂		○西山聖達の門人一遍、時宗を唱う	○十一月 覺信尼、洛東大谷に本願寺を建つ、久遠實成彌陀本願寺の號を賜う	○望西樓了惠、和漢語燈錄を輯録す	○十二月 幕府御家人の出家を禁ず		
	○所迎法師 敬西房信瑞著、明義進行集を泉州にて寫す(大正七年河内金剛寺にて發見)							

179	175	172	171	169	167	164	162
4 應長 辛元 28亥年	德治 丁二 未年	四年	元亨 三年	庚三 子年	4 正安 己元 25亥年	丙四 申年	甲二 午年 永仁
1311	1307	1324	1323	1301		1296	1294
			○十一月十二日 拾遺古德傳繪奧書(古、九)	○十一月十九日 拾遺古德傳繪奧書(古、九)		○十二月廿六日 同 (〃)	○九月十三日 傳法繪流通書寫(傳、四)
			○六月十四日 釋明源が拾遺古德傳書寫(本願寺 所傳藏本―但し現在散佚)			○功德院舜昌、勅を奉じて法然上人行狀繪圖四 八卷の草稿を上る	
			○後伏見上皇、御發願にて法然上人行狀傳詞書を 宸書、伏見法皇、後二條天皇隨喜し給い、尊 圓法親王、實重以下各數卷を淨書す、凡そ十 年を経て正副二本各四十八卷成る(御傳縁起)				
			○六月 尊彥親王得度、法名尊圓				
			○十二月 東大寺巖然、淨土源流章を著す				

203	202	198	191	190	189	185	183
乙亥年	1 甲戌年 建武 元年	元德 庚午年	癸亥年	壬戌年	2 辛酉年 元亨 元年	2 丁巳年 文保 元年	正和 乙卯年
1335	1334	1330	1323	1322	1321	1317	1315
<p>○十一月十二日 拾遺古德傳繪奥書(古、九)</p>							
<p>○十月廿一日 上人の版畫彫成(正和版)(知恩院藏)</p> <p>○智演(旭蓮社澄圓)元に入る</p> <p>○九月 東大寺凝然寂</p> <p>○旭蓮社澄圓歸朝し廬山流の淨教を傳う</p> <p>○八月十六日 東福寺虎關元亨釋書を著す(大谷寺源空を傳う)</p> <p>○三月廿九日 望西樓了惠寂</p> <p>○五月九日 青蓮院慈道法親王、法印宗昭(覺如)をして親鸞影堂留守職を襲かしむ(本願寺文書)</p> <p>○正月十四日 舜昌(知恩院九世)寂</p>							

305	225	242	240	219	214	204
永享 丁九年	應永 十四年 亥	甲三 寅年	10 壬元 4子年	文 中	7 丙元 4戌年	2 丙元 29子年
1437	1407	1374	1372	1351	1346	1336

○八月 日 法然上人繪詞（近衛本）の玉泉坊覺
泉書寫（近下）

○六月 尊氏の戦火にて親鸞の大谷廟堂焼失（存
覺一期記）

○十月四日（貞和二年） 本願寺聖人親鸞傳繪（釋
弘願署名、東本願寺藏）奥書

○正月十九日 本願寺宗昭（覺如）寂す、知恩院
誓阿葬送（存覺袖日記）

○七月廿五日 旭蓮社澄圓寂

○七月十九日 誓阿普觀寂す、さきに大和當麻に
法然上人繪傳等を移し往生院を開き隠栖中
（寶贊、五〇）

○六月廿九日 知恩院と當麻往生院と契狀を交す
（良正院文書、往生院文書）

○十一月 日 八尾市慈願寺藏の拾遺古德傳書寫
奥書

379	355	352	348	344	335	319	315	
永正 辛未年	7 丁酉年 20 末年	長享 十六年 甲辰	十二 庚子年	文明 丙申年	3 丁酉年 5 亥年	應仁 辛未年	寶徳 丁卯年	文安 四年
1511	1487	1484	1480	1476	1467	1451	1447	
<p>○十一月七日 十卷傳卷五奥書(十、五)</p>								<p>○十月廿五日 法然上人繪詞(近衛本)の書寫 (近、下)</p>
<p>○正月 上人三百年忌如法念佛を光明寺に修す (實隆公記、如是院年代記)</p>								<p>○十月十三日 仁和寺の本願寺律院相傳の上人自筆の往生之繪散覽に供す(康富記)</p> <p>○知恩院の影像を江州伊香立に、勅傳四十八卷なと西山廣谷の民家に移す(義山行業記)</p> <p>○六月十一日 御所にて法然上人繪四卷を拜見 (實隆公記)</p> <p>○三月五日 御土門天皇、上人の畫像を天覽(御湯殿上日記)</p> <p>○五月廿七日 青蓮院尊應法親王、足曳の御影を見る</p> <p>○三月 蒲生秀紀、知恩院開山の像を修理す(翼贊、三七)(知恩院文書)</p> <p>○正月 知恩院祖像衣色復舊す(本願寺通紀)</p>

421	407	404	399	395	394	392	385
廿二年 癸丑年	己八年 亥年	天丙五年 文申年	享辛四年 祿卯年	丁七年 亥年	丙六年 戌年	大甲四年 永申年	十四年 丁丑年
1553	1539	1536	1531	1527	1526	1524	1517
					○正月十三日 ○正月十七日 ○正月十八日 ○正月廿七日 ○二月十四日	十卷傳卷八奥書 卷九 卷一〇 卷四 同	(十、八) (十、九) (十、一〇) (十、四) (十、二)
				○正月廿六日 殿上日記、言繼記	天皇、上人行狀繪圖等叡覽(御湯)		
			○閏五月七日 れ上人傳を講ず(二水記)	知恩院二七世德譽光然宮中に召さ			
			○六月八日 黒谷聖人繪詞拔書の識語)	本願寺十世證如勅傳書寫(本願寺藏)			
			○八月 の諡號賜わる(續史)	尊鎮法親王の執奏により上人に光照大士			
			○正月廿八日 也」と記す(大阪府門真願得寺藏)	釋實悟が拾遺古德傳繪を書寫し 「此一部十帖、不慮令感得畢、猶可校他本者			
				○正月十八日 む(翼贊、五二)	詔して毎歳上人の御忌を修せし		
							○八月廿八日 災を免る(寺記、宣胤卿記)
							知恩院回祿、但し祖影並に勅傳等

512	477	475	471	449	438	437	426
正保 元年 甲申	十四 年 己酉	十二 年 丁未	慶長 八年 癸卯	天正 九年 辛巳	十三 年 庚午	十二 年 己巳	永祿 元年 戊午 2 28
1644	1609	1607	1603	1581	1570	1569	1558

○八月廿五日 勅傳（知恩院本）書寫（燈譽八十
六歳）

○三月廿六日 美作誕生寺再興（翼賛、五〇）

○四月廿日 釋實悟が七十九歳にして拾遺古徳傳
繪校合、奥に「此拾遺古徳傳繪詞四卷一帖而
已、不慮以存覺上人御筆、令校合、相違之
處、注付訖、尤可爲證本者也」と書す（大阪
府願得寺藏）

○六月廿五日 勅傳（知恩院本）書寫（三十郎三
慶）

○二月十二日 江戸幕府知恩院を造營、因つて親
鸞の墓を移す（梵舜日記、當代記）

○正月朔日 宇治にて歸命院文譽知恩院の勅傳を
書寫（徳富蘇峰藏書）

○法然上人繪傳二卷後陽成天皇より増上寺へ下賜
さる

○正月 黒谷上人傳繪詞一部十册（片假名繪無し）
版刻

509	579	574	571	568	565	545	535	534
4 辛卯年	正徳 三年	寶永 三年	十六 癸未	十三 庚辰	元祿 十年	延寶 五年	丁未年	寛文 六年
1711	1706	1703	1700	1697	1677	1667	1666	

○仲秋の頃 知恩傳を孝璘書寫(知、下)
○冬至 知恩傳上、下奥書(知、上下)

○二月 同一部十册(平假名繪入) 刊行

○八月 後水尾法皇、知恩院勅傳を召しよせ觀覽、宮中に留むること十數日、勅して山外不出となさしむ(勅傳隨聞記一)

○三月廿五日 法然上人繪傳(刺繡)四幅(大阪一心寺藏)願主直愚、結縁戒名三六二四人、六年の功成る

○正月十八日 圓光大師と勅諭

○義山勅修御傳を校訂、古欄臨畫し雲竹書寫して梓行

○十二月 義山の勅傳翼賛六十卷大成

○十一月 勅傳四十八軸修補(知恩院文書)

○正月十八日 東漸大師と加謚
○正月廿二日 知恩院にて上人五百回遠忌、門主勅會導師、勅會の始め

679	670	664	656	629	621	604	603
文化 辛未年	享和 壬戌年	寛政 丙辰年	天明 戊申年	十寶曆 辛巳年	寶曆 癸酉年	4 元文 丙辰年 28	二享 乙卯年 十保
1811	1802	1796	1788	1761	1753	1736	1735

○三月 勅傳叡覽（知恩院書翰控）

○四月 仙洞御所にて勅傳叡覽（右同）

○九月 法然上人傳繪圖四幅（京都市正林寺藏）
寶松院忍海書、神田要信、同幸信彩色にて成る

○正月十八日 慧成大師と加諡

○正月廿二日 知恩院にて上人五百五十回御忌勅會

○十月三日 有栖川宮、知恩院にて勅傳を御覽（日鑑）

○五月 勅傳複本出版

○春 法然上人傳版畫四幅（知恩院藏版）横井金谷筆にて成る

○正月十八日 弘覺大師と加諡

○正月廿二日 知恩院にて上人六百回遠忌勅會

767	751	729	721	712	711	700	685
三 己 二 亥 年	十 明 治 癸 六 未 年	2 ・ 辛 元 久 酉 年	嘉 永 癸 六 丑 年	12 ・ 甲 元 辰 年	弘 化 十 癸 卯 年	天 保 壬 三 辰 年	十 丁 丑 年
1899	1883	1861	1853	1844	1843	1832	1817

- 十月廿六日 青蓮院尊眞法親王、勅傳閱覽
- 五月八日 勅傳護持につき知恩院門主規定書下付
- 七月 將軍家慶、勅傳台覽
- 九月十日 知恩院門主尊超法親王、江戸城大奥にて勅傳講釋
- 七月 幕命により冷泉爲恭等一門畫工勅傳の複寫にかかる
- 三月 爲恭、勅傳の複寫終る
- 冬 法然上人傳版畫四幅(知恩院藏版) 冷泉爲恭等にて彫成
- 正月十八日 慈教大師と加諡
- 正月廿二日 知恩院にて上人六百五十回遠忌勸會
- 一月 勅傳(版本)を天皇、皇后兩陛下へ献上
- 八月一日 法然上人行狀繪圖(勅傳) 四十八卷(知恩院藏) 重要文化財指定

784	782	781	779	772	774	771	769
丙五 辰年	甲三 寅年	大正 癸二 丑年	四 辛四 亥年	四 巳二 酉年	三 丙九 午年	三 癸六 卯年	三 辛四 丑年
1916	1914	1913	1911	1909	1906	1903	1901

○八月一日 法然上人繪殘缺二卷(増上寺藏)重要文化財指定

○三月廿七日 法然上人形狀畫圖(勅傳)四十八卷(當麻院藏)重要文化財指定

○四月十五日 拾遺古德傳繪九卷(茨城縣常福寺藏)重要文化財指定

○七月 法然上人全集(望月信亨著)發刊

○四月五日 選擇集(京都市廬山寺藏)重要文化財指定

○二月廿七日 明照大師と加謚
○三月一日、四月十九日より各一七日間知恩院にて上人七百年遠忌法要

○四月十四日 圓光大師(法然上人)坐像一軀(當麻院藏)重要文化財指定

○一月廿五日 淨土宗全書廿卷刊行

○五月廿四日 法然上人像一幅(茨城縣常福寺藏)重要文化財指定

799	795	794	793	792	786	785
辛未年	丁卯年	12 丙寅年	昭 和 十 四 乙 亥 年	十 三 甲 子 年	七 戊 午 年	丁巳年
1931	1927	1926	1925	1924	1918	1917

○四月五日 拾遺古德傳繪殘缺一卷（茨城縣無量壽寺藏）重要文化財指定

○四月八日 法然上人繪傳三幅（岡崎市妙源寺藏）重要文化財指定

○〃〃 法然上人繪傳二幅（三重縣西導寺藏）重要文化財指定

○三月十一日より七日間 知恩院にて浄土開宗七五〇年記念大法要

○七月 法然上人行狀繪圖（大正新校）刊

○三月 法然聖人繪（弘願本）知恩院に納まる

○七月 勅修御傳の英譯（石塚龍學）出版完成

○十月 法然上人恵みの月影（漆間徳定新作・浄曲）大阪文樂座に上演

○四月廿五日 法然聖人繪殘缺一卷（知恩院藏）重要文化財指定

○五月上旬 神戸川崎武之助氏藏法然上人傳繪三卷に釋弘願奥書あるを確知す（井川定慶）

○六月 法然上人行狀繪圖四十八卷（日本繪繪物集成第一五・第一六卷―井川定慶解説）出版

823	820	817	807	804	802	801	800
三十 乙未年	廿七 壬辰年	二 巳丑年	十 己卯年	十 丙子年	九 甲戌年	八 癸酉年	七 壬申年
1955	1952	1949	1939	1936	1934	1933	1932

- 四月 知恩院にて上人降誕八百年記念法要動修され、京都恩賜博物館にて法然上人繪特別展覽あり
- 五月 法然上人繪大鑑(井川定慶、望月信成編)出版
- 一月廿三日 法然上人繪傳殘缺一卷(足利市田村彦七氏藏)重要文化財指定
- 一月三十日 拾遺古德傳繪殘缺一卷(新潟縣西脇濟三郎氏藏)重要文化財指定
- 五月六日 法然上人繪傳殘缺一卷(東京博物館保管)重要文化財指定
- 五月廿七日 法然上人像一幅(京都市二尊院藏)重要文化財指定
- 二月十八日 法然上人七ヶ條制誡一卷(京都市二尊院藏)重要文化財指定
- 九月 法然上人傳全集(井川定慶編)出版
- 二月二日 法然上人行狀繪圖(勅傳)四十八卷(知恩院藏)國寶指定

829

三
六
年
辛
丑

1961

- 二月二日 法然聖人繪殘缺三卷（神戸川崎家舊藏・京都市堂本四郎氏藏）重要文化財指定
- 三月 法然上人全集（石井教道博士編）出版
- 二月廿七日 和順大師と加謚
- 三月一日より一七日 知恩院にて上人七百五十年遠忌法要
- 三月七日 法然上人繪傳の研究（傳全集續篇・井川定慶著）出版

五、 題名ごとの目録文の巻

四、 主題ごとのこと、 宛封紙と関係する部類の分類のしりとり、 索引

三、 一

二、 法然上人傳全集
前篇 本傳

索引

一、 同一氏名を連ねておられるもの、 同一の歴史日を出して和文の類ご頁十

一、 五十百部ご頁十

八、 四

凡 例

- 一、五十音順に列す
- 二、同一項で多数にのぼるものは更に分類項目を出して研究の便に資す
- 三、同一項で兩、三様に別稱せられるものは「ハ」を用いて他項指示となし参照と檢索に便ならしむ
- 四、主題と同一のこと、或は他と識別する説明の役割として「ヘ」を用う
- 五、假名づかいは原文に従う

ア

あとを一廟にしむれば

二四三

阿性房

一三三・三六・七三

阿勝

九六

阿日

二四・九七

阿波院

五〇・五二

阿波介

九七・九・五二

阿彌陀經

一四五

――の心

二七

唐・吳・訓の三卷をよむ

二七

阿彌陀佛名

三三・三三・四六・五三・六二・六七・七二・七五・八〇・九六

粟生野

二七・四五・六四

明石の源内〔定明〕

三〇三・三七

赤築地

七五

葦浦

三九

葦屋

三九

頭くぼく藤、眼黄光あり

三九・五三・八〇・九七

尼女房たち

二四・三三・四二・六一

天野の四郎〔耳四郎・教阿〕

一〇三・七〇

甘糟の太郎

一五・四〇

安居院〔聖覺〕

一〇四・九七・九五

安西

一〇四・九七・九五

安照

三〇三・九四

安樂房

上人に念佛の法義を聞く

一四六

選擇集の執筆

四九・三六・六四

引導寺にて禮讚修行

四四・五八・四〇・五八・六六・六一

禮讚

五五・五九・九五

如法念佛

九六

隆信の臨終善知識

五・六九

鹿谷の別時念佛

三四

處刑

五八・六八・六〇・七六・七二・七六・七六・八四・八三・九六・九〇

安蓮

一〇三・九四

イ

いのりのれうにも念佛

七

伊勢大神宮〔大廟〕

三五・五三

移葬〔改葬〕

二六

飯山〔相模國〕

三五〇・七四・九七

石金丸

七〇

一圓

九五

一向専修停止の勅

二六四・三三

一向専念の義を立つ

二五

一切經

一八

いづれの宗の

一八

披閱

一一・三三・五九・八四

補寫

四三・五七四

施入

三六・四四・五〇・五八・五九・六四・七三・七六・八二・八九

一紙小消息〔小消息・黒田上人への御文〕

一七・五七六

一心専念の文

三四・六三・三〇・三五・七六

一朝の戒師

四

一念（往生）義

一九〇・四元・四三〇・七〇・七五九・九六・九七

一念十念空しからず

一一三

一枚起請文

二八四・三三・四八・五三・七六

一枚消息

二五・四三六

稻岡

四・五・五九・六四九・七九・七九二・九七・九九

稻岳

八二五

引接寺本尊開眼

五九

引導寺（八坂）

四・四八〇・六六・六八・七五

印西

四七四・五七・五五・六〇・六六・九六

印誓

八四五

印藏（沙彌）

五六・五三・四七・五七・七二・八六四

ウ

宇都宮彌三郎〔蓮生・實信房〕

熊谷との對面

一六

蓮生の讀み別け

七五

勝尾寺の草菴に尋ぬ

一六・四三五

改葬に

二六六・四四・四五・五〇・五八・六四・七三・八一

牛飼童の往生

八六三

漆（間）

五・五七・五九・六四九・七七・八〇・八・九四・九七

賣間

九八九

漆（間）時國〔時國〕

四・三九・三四〇・五四三・七六九・七九・八〇・八・八五・九元

雲居寺

五九

雲朗

八六七

エ

江口

四八七・五〇七・五二六・五三〇

遊君

四三三・六三

烏帽子も着ざる男

一一三

惠光房〔永辨〕

三三

惠山

七五四・七六

惠心〔源信〕

三・三四・二六・二七・二〇六・二六・二六・三三

惠忍

九四

永尊

九七五

永辨〔惠光房〕

三・三六・四七四・五七・六九・七三・七六・八〇

影像〔眞影〕

一〇・三四三・五八・五九四・六五八・七九四・八一・九八・九〇

叡空〔慈眼房〕

一一・五五

上人の入室

一一・五五

上人暇を乞う

三〇・三三五

山王影向

三〇・三三五

戒體論

圓頓戒を上人に授く

小乗戒の事は非學生

觀佛稱名の論

淨土門に入る

却て上人の弟子となる

信空の入室

臨終

驛路は大聖のゆく所

越後國よりの上人

圓戒 (大乘圓頓菩薩戒)

圓基

圓空 (來迎房)

圓玄

圓宗文類

圓宗の棟梁

圓證 (九條・月輪殿・兼實)

圓照 (兼實)

圓照 (遊蓮房)

圓信

圓智

圓長

一・三三

六七・八五

一六

二四・五二・五九七

三〇・六五・七三

二・五九

二六九

三四六・五九八・六六五・八三九

三九・四八六・六二九

五七五

一〇・二二・三〇・四三・五・五・三六九・七三三・二八四・

五九八・七九四・九七

二六五・四九九・五二四

二六七・九七四

三九

一四

一〇

五二・三〇七・四二二・四〇〇・七七・九九

九九

二八三

八八五・九〇六

三〇四・九七四

八六

圓頓一實の戒體

圓能法印

圓明

圓明 (善信)

圓明房善弘

圓隆

圓良法印

延年種々の藝

才

才

小藏山 (小倉山)

御室

御墓堂 (光明寺)

大胡小四郎隆義

大胡太郎實秀

上人御消息

その妻室と往生

大谷

大谷寺

大谷の禪 (御) 房

大谷の墳墓 (廟堂)

大童子

大童子

三三一

四三

八八・八三九・八三〇

五四九・八六

六五七

三九

四一・四三

四三

四三

四三

四五五・五〇二・七三三・七六三

一五・一七

二六七

一五三

一五三

一五三・四一五・八〇六

一五七

二五・七二・七六八・八〇五・九七六・九七九・九八三

九九

二四二・四三六・四四三・四四六・四九一・五七五・六六八・七四四・八七・

八八・八六・九〇・九三

二七・六五・四九・五九・五〇・七三・八〇六・九〇五・九四

六五

小原

八〇

大原

六〇・三

大原談義

三〇・三三・三五・五七・五九・六〇・六六・七〇・七四・七七・

八〇・八四・九一・九五

大原にして

二六・三〇

往西

九五

往生 (上人の)

二四・四四・四五・五〇・五三・六四・七六・七九・

八五・九五・七六・七七・九六・九七・九八・九九

往生院 (肥後)

二九八

往生之業念佛爲先

三六

往生の用心について

一三四

往生は不定とおもえば

三三

往生大要抄

三

往生要集

二四・二六・三〇・三三・三五・三六・三九・四一・四三・四五・

應身應土

三七

應神天皇御誕生

五

老の眠たちまちに (序)

三三九

押部

一三七・五〇六・七三

押領使

四・五

押小路殿

四三

遠流 (配流)

五五

力

かたみとて (和歌)

八・三六・三四・四〇・五九・五九・五九

かわや

五二

花山院 (兼雅)

三

賀茂の邊

二八六・三三・四六

河原屋

三五

明神

八九八

我本因地の文

三七・三四七

餓鬼

八五〇

戒を先きにし教を弘む

四八四・五五

戒心 (隆信)

二〇四・九四

戒心七ヶ條起請に署名

一・二・三三

戒體論

一〇

戒壇院

九七五

戒蓮

九八五

開宗年次

五三六・五八・六六一・七四六・九七

承安四年春

九九三

承安四年二月九日

九九三

承安五年春

二四・三〇・三四六・七九六

安元元年

四七・五〇九・五一・五七

建久九年

九九九

缺年

五九・七四

開宗の根據

二四・二六・三〇・三四五・五一・五九六・六一・

七六・八二

學西

三二・九七四・九八

諸教所讀の文

四七・五七

學秀

二〇四・九七四

觀經疏付屬の釋

七九

學生骨

八三九・八四五

汝好持是語の文

五三六

學問の所詮

二九三

往生要集

五九六・六一・七七〇・七四六・七四九・七五九・七九一

學問は初めてみたつるは

一九四・三四九・四七二・五三三・五四八・五九三

改葬

二六五・四五一・五八一・七〇〇・七三三・九〇六

勝尾

一六・五五五・五四二

懷妊

四

勝尾山

四八九・五七〇・六三四

角張〔成阿彌陀佛〕

二五・三七・三三・四三三・七三三・七六〇・八〇五・八九六

覺阿彌陀佛

二六六・四四四・四四四・七三三・八七七・九九〇

勝尾寺にしばらく住む

三九・五八・八二二

覺快法親王

四〇・六六

一切經施入

四・三九・三四一・五三三・五九九・六五〇・七九二・八六六・九七九

覺兼

三九

剃刀の夢

七〇

覺悟房

五八

鐘本房〔辛酉〕

四三

覺勝

九七五

鐘下房〔辛酉〕

一八七

覺什

四七四・五三七・五三三・五三三・六〇〇・六六九

兼實〔月輪殿・九條一〕

二四四・四四〇・四九五・五〇〇・五三三・六四〇・七六〇

覺成

九七四

兼時

九六八

覺實

六八一

兼雅

四一・五三

覺信〔三井〕

四九・一〇四・九七四

兼光卿

四〇

覺超

二六

唐垣の上の蛇

三二・三三六・三四八・四七六・五五五・五五五・五八八・五九八・六六四

覺辨

九七五

兼光卿

四〇

覺妙

一〇四・九七四

兼光卿

四〇

川合の法眼

四九元

観佛と稱名の勝劣

二四・三四六・五二・五九七・六六一・八二八

桓舜

八七〇

観法

八八五

神崎

四八七・五〇七・五六・五四〇・六一・八七・九三

眼光を拜す

二七三

寛惠

五四四

願西

二〇四

寛雅

一三・三四・四三・五〇・五二・五九六・六三・七九・八三・八四・八五・九〇

願蓮

九七五

寛覺 (智鏡房)

六五四・六三三

雁塔

二六八・五二・五九

還歸 (京都へ)

二四〇・三三三・六七

感喜

九七五

キ

感西 (眞觀房)

二〇三・五二四・五五・六三・九七四

鬼神

七五・七九・八三・八七・九二七

感聖

九七四・九七五

歸西

二〇三・九七四

観阿彌陀佛

九七四・九七五

貴女

二八五・三三三・四三八・七五・八九九

小兒を教養 (智鏡房)

七・三三七・三四一・四七〇・五九・五四六・五五・五九〇・七四二・七六九

起請文を進す

四〇六・五六〇

持寶房への状

八・八一

機嫌戒

二八〇・四五四・七五・九〇七

還て弟子となる

二〇・五八・七四七

騷中吟

七六六

観學

七九三・八二・八三六・九四一

義運

二〇三・九七四

観經の曼陀羅

一九七・三三七・四八〇・五三三・五五九・六〇〇

宜秋院

二五四

観空

四八五・五〇三

北政所 (月輪殿)

九六

観源

九七五

瘧病祈請

八・三三・四三三・四八三・五九四・六四七・七〇・七五四・七七六

観性法橋

四〇・四一

清水寺

五八・五七・六七〇・八五九

観尊

九七四

説戒

三三三・五七・五五九・六五・七五〇

観然

九七四

教阿彌陀佛 (天野の四郎・耳四郎)

一〇三・一〇七・三〇・七七・八五九

教行信證

九七四

九〇九・九七八

教慶 六二七・七〇

教西房 一六五

教芳 二〇四・九七四

敬西房〔信瑞〕 一六五

敬佛房 三三三

敬蓮社 八四・三〇〇

鏡賀法橋〔醍醐〕〔慶雅〕 七七七

鏡西 二〇四・九七四

鏡像圓融疑問事 三七二・六六六

經の島 三三〇・四四五・四〇六・五五六・五四〇・五六六・六三二・七二五・七六六・八八八・八八三

九七

行願 九七五

行基 三九

行空 二〇三・三二八・五五四・五五五・六三三・九七一・九七四・九九九

行賢 三九

行舜 五四・五九九・六六六・六八一

行西 二〇三・五〇四・五〇五・六三三・九七四・九七五

行智 三九

仰善 二〇四

業西 二〇四

堯禪 五三七

公繼〔野宮左大臣〕 五四

ク

くちなは〔蛇〕 三〇・三三三・三三六・五四九・五八八・五九三・八四四・九八八

九條〔關白〕兼實〔月輪殿・兼實〕 四八・九六七・九六八・九七六

九條殿 九・五一・五三八・五〇六・二九

九條堂 九六六

九品の色紙〔天王寺〕 六七

口稱三昧 三三

口傳相承〔念佛往生〕 八三

口傳なくして 二一・三六

久米の南條稻岡庄 四

功德院〔皇圓〕 九

功德院〔賀茂神宮堂〕 二八六・五四八

弘願 一一三・五九・五八・五四三

求佛房 二五〇・四四四・五二四・五八七・七八・九〇四

求法房 九八六

具慶 九七四

愚痴にかへりて 二七・三二・五三三

空阿彌陀佛〔法性寺〕 七・三三・三三・四三三・四五六

空寂 五・一〇・五三・五三・六四〇・七三三・七四七・七六六・九七・九七四・九七五・九七六

空仁 二〇四・九七四

熊谷次郎直實〔蓮生・法力房〕 一四六・二七・二七九・三三九・四〇〇・五七

聖覺を尋ぬ

吉水菴室に入門

月輪殿へ推參

さかさ馬

宇都宮頼綱との關係

上品上生の發願

往生

自筆夢の記

熊替入道

桑原左衛門入道

黒田の上人への御文〔小消息・一紙小消息〕

黒谷〔草菴・報恩藏〕

六九・七四・七七・八四・九一・九九

慈眼房叡空

上人隱居

黒谷の法華道場に普賢來現

ケ

華嚴宗を傳受

袈裟王丸

外相の善惡

解脱〔貞慶〕

詣西

慶安

慶雅

慶俊

蓋以、三世に多の佛出〔序文〕

蓋以、諸佛世を利〔序文〕

血脈

決疑抄〔淨土決疑抄〕

見佛〔大和入道親盛〕

引導師の禮讚

後白河法皇の御菩提を弔う

大原談義に列す

七ヶ條起請の連署

建春院

顯惠

顯願

顯眞〔座主〕

上人に歸す

大原に籠居

大原談義

阿彌陀佛名の事

大般若衆

二〇四・九七四

九七五

九七五

九七五

四六七・五七七・五八三・六四七

六四七

一四

三三・四四五

五一〇

四・三六・六一・七五・八四〇

四四・五六

五五・六〇・六六・八四五

二〇三・五四・五五・六三・九四

六〇

六一

二〇四・九七四

六八

三・五二・五七・七三・七四・七五・九八

六〇・三五三

三三・四四・六九・六六・七九・七〇・八四三・八四五・八〇

六二・九八

四七八

五五九・六二

念佛停止の訴をうく

五六・六七・六九

配流を送る

八五・九二

中陰の法事

九〇三

顯選擇

二六五・三三・四〇・七五

顯智房

八三

顯明(禪光房)

六〇

憲基

八六

憲實

八五

女暉

三五三・三三

女修

三九

女耀

一〇四

源雲

九七四

源海

一〇三・九七四

源空(法然房)

二〇四・九七四

命名

二六・三九・五七・五八・六一・二七・三二・四七・三六・三五九

自稱

一〇・三四・五九四・六九・七九・八一・九〇

署名

一五・二四・三七・四〇
二七・四七・五七・一七・二四・二九・三〇・三三・三五・九四

源空本地身の文

九八七

源光〔持寶房〕

八・三四・五七・五九・七三・八六・九七・九九

上人入室

一〇・三四・五九四・五九・七九四・八一・八六・九〇

上人の師僧

一〇・三四・五九四・五九・七九四・八一・八六・九〇

蛇身となる

八三六

源西

九七五

源信〔恵心院僧都〕

九七五

源智〔勢觀房〕

二八四

上人に入室

八七・八九九

一一常隨

二八四

圓頓戒付屬

二八四

七ヶ條起請の署名

三〇三・五四・五五・六三・七四

貴女にあう

三三・四八・七五・八九

一枚起請文

二八四・三三

上人の臨終

五二〇・五三・六四〇

中陰の法事

二五一・四四・六四・七九

門流

三〇三

上人傳記

七七三

往生

二八六

源也

九七五

源蓮

一〇三・五四・五五・六三・九四

現世をすぐべきやう

三九二

コ

この世のいのり

一五二

小御所の女房

五五・五九・七五・九五

小坂義

三六・六三

小消息 (一紙小消息)

小舍人

小松谷

小松谷の御房

小松殿

小松の庄

小矢 (箭)

小矢兒

子松庄

古年童

五條西の洞院

五祖の影像 (浄土五祖像)

後白河法皇

往生要集按講

上人の影像のこと

如法經書寫

授戒

東大寺造營と大勸進職

御臨終善知識

追善の佛事

後鳥羽院

御所の女房出家

御臨終日記

公胤

上人を破す

選擇集を破す

浄土決疑抄を著はす

大般若衆 (静惠の臨終祈禱)

上人に信狀

中陰の導師

往生

公金 (公全?)

公全 (湛空)

公雅

弘法大師より御使

十住心論

弘鑒 (公全)

向西

向福寺

光圓

光圓 (功德院)

光明寺 (粟生野)

光明寺 (嵯峨)

光明寺 (筑後)

光明山

光明山

五〇

五〇・五八三

二五三・七三三

二五三・三三三・四四五・六五七・七〇・七六・八六九・九七

五五九・六六・六八

七六三・七八・九八

二五二・四四五・四九八・五〇四・五九九・六四二・七九・九六・七七・

二五五・四八・七〇・六一

五五

六八一

一九

一三三・一七

八三三・八八六

九七四・九七五

五〇六・五〇・五五・五九・五五・五七九

八三六

八二・八三五

二六七・七三三・九七・九四六

七三三・七三三

二九

七六

七六

七六

光明房

一九〇・四三〇・七二八・三

金光房(石垣)

三二七

仰善

九七四

金剛(寶)戒

一五〇・二九七・三三二・六八六

迎接房

一〇

金剛草履

三八

幸阿彌陀佛

二六七

金色の圓光

七八・九三三

上人の弟子

九八九

根を切れ

七五七

一念義

一八七・一九〇・三三八・四一九・七〇

欣西

二〇三・九七四

選擇集の傳授

七九

欣蓮

九七四

圓頓の戒體を聞く

三〇

サ

七ヶ條起請の署名

二〇三・五三四・五五五・六三三・九七四・九五

さかさ馬

一七・三九三

流罪

二六五・四三二・六六・七三三・七五・七六六・九七〇・九七四

作佛房

一〇・三六・六九四

好阿彌陀佛

九七四

嵯峨に參籠

二・五五〇・七四四・八三三

好西

三〇四・九七四

釋迦如來の告げ

三

孝璣

七五四・七六

移葬のこと

二六七・四五三

高辨(明惠)

二五五・二五五・三七三・四六一・八四四・八五五・九七九

火葬

五八一

皇圓(功徳院・肥後阿闍梨)

四〇六

遺骨をおさむ(小藏山)

四五五

上人の師

九・三三三・四三三・五八六・五九二・九四四・九七七・九七〇

西阿彌陀佛

三七・三六〇・四三三・四四五・五七七・六九七〇・七五七・七三四・七六六

皇覺

一五

西意

二〇三・五三四・五五五・六三三・六八・九七四

皇慶

六四

西縁

一〇三・五三四・五五五・六三三・九七四

廣隆寺

二六七・四三三・六四四・九六

西觀

二〇三・九七四

興福寺

五四・五七・一九七・二〇七

西教

九七五

心の亂るゝは

三三

二一五七

西源

九五

實宗(大宮)

三三・三四九・四四四・七六・九六七

西住

二〇四・九七・九七四

三觀一心

一〇

西仙房(信寂)

二六・三〇・三七〇・三七三・三五五・三七九・六九・九六六

三種の心

二四四

西尊

二〇四・九七四

三重の念佛

二九六・三〇〇・三三〇

西道

八五

三聚淨戒

一八四

西入

二〇四・九七四

三心

二四四・二四九

西忍

九七五

三心の様

一〇九

西念

九七五

三心具足の名號

一一二

西佛(頓宮内藤)

二六五・二六六・四四〇・六四三・八〇六・九七五

三心料簡事

七六二

西法

九七五

三尊大身を現す

三三・三四・七〇・九八

西明寺の禪門

一六四

三尊來現

三五・三七・五〇・六七・七〇

西蓮

二七五

三德殿

八一七・八三

罪人なを生る

一一二

三部經釋

一九七・二〇一

摧邪輪

二五五・二七三・四六・九七

三昧發得

三四・五三〇・六四・七三三

相模房

六一

三昧發得記

三三・三七〇・五九・六四・六五・七九・七九〇

相模の四郎

三二一

三明房

三三・三六六

櫻の池

一九四・三四九・五三二・五三八・五九三・七〇・七五五・七九七・八三六・八六五

山門蜂起

四〇六

定明(明石の源内)

三二

散心稱名の行

九七四・九七五

時國との立合

三二

散心念佛

六七

夜討

五・三六・五八・五五五・五九・六三三・七九三・八一九・九六四

逐電のあと

六・七六九・九四九・九五三

定長卿

四三

貞明(定明)

八一九

示蓮

一〇五・九七五

シ

死刑に行はるとも

三三・三〇〇

自阿彌陀佛

二〇四・九七四・九七五

自筆の記

五九・六七・六八四

自筆の書

三

自筆の誓文

二九

持阿彌陀佛

九七五

持戒者の念佛

二九一

持寶房〔持法房〕〔源光〕

三三・三四二・七九・九九四

慈圓〔慈嶺〕

九七四

慈覺大師

三九・四〇・四三・六七・二四八

付屬の袈裟

二四四・四九五・五三三・五二〇・五二六・五三三・八〇五・九〇一・九六〇

慈眼房〔叡空〕

九六・六八

慈現房叡空

八三〇

慈嶺〔慈圓〕

四〇・四八・六六・七三・四〇六

上人を敬ふ

七三三・七三三・八六三

親鸞のこと

六九四

配流を見送る

八五・九一九

大谷の禪房に迎ふ

二四一・四九一・五七五・六三八・七四八・八八六・九三六

中陰の佛事

二五二・四四四・四七九・五七九

慈珍

九三・九三六

慈仁

八二〇

鹽飽〔秋〕の地頭

七六

高階保遠入道西忍

三三三・四三六・七八

時遠入道西忍

五九

高橋入道西忍

四八・五七・四二・六三

西佛

八七

直聖房

九三

重經〔藤右衛門尉〕

三五

重衡

一五・三五〇・六五八・六〇・九一

重盛

四九

鹿谷

八六〇

實光

二〇四・九七四

實昌

五

實成房

二八〇・四三三・七四・九〇七

實俊

八八五

實信

九六七

實信房〔宇都宮・蓮生〕

九七四・九七五

實念

二〇・五八三

實範〔中の川小將〕

九七四・九七五

實運

九七四・九七五

七ヶ條起請

二〇・四七・四八・五三・五三・五三・六三・六八・七五・八六・九七

七萬遍の念佛

二七・六五・七〇・七九

寫經七ヶ日事

四七

寫經の水

四〇

三四・六五・六九・八六・九四・九七・九八

如法念佛

八七・九七・九八

縛空〔親鸞〕

七ヶ條起請署名

二〇三・五三・六三・九七

寂因

九七五

鹿谷別時念佛

三四

寂西

九七四

宗源法印

二〇三・五四・五五・六三・九七

處刑

三九

宗々所立の義

七〇三・七五四

重宴

五八

修乘坊(重源)

一六・四七・五三・五三・七二・八五

重運(住運)

五九

修明門院

四一

俊乘坊(重源)〔修乘坊・春乘房〕

五九・五五七

首楞嚴院

四一

東大寺大勸進職

一九六・二九四・三三・五九九・六六七・七九

拾遺傳

六五〇・七三

一一造營供養

二九五

十戒を授く

九八三

五祖像を請來

二九・三三六

十種供養の儀

四一

大原談義

三三・三五四・四七四・五七・六九九・九八一・九六

十禪師

二二

阿彌陀佛名

五・三五・四六・五三・六一・六七・七七・七五・八〇・三九六

十二門の戒儀

一五

上人を敬ふ

七三

住阿

二〇四

配流を見送る

八八

住心房(三井寺)

一一・九〇三

不斷念佛・住生

二九五

住心房(出雲路)

三二八

春乘房(重源)

五五・五九

住信房

四九六・五四・七六

舜昌

九三

住眞房

二五〇・四四・五七・六四

出離の行

九三・三六〇

住蓮房の禮讚

三三・五三・九五

志

二五

引導の禮讚修行

四・三六・四八・五八・五三・六六・六八

道

三三

隆信の臨終善知識

五・六九

述懐抄

二五九・七四

遵西〔安樂〕	二〇三・七二・九四	昇蓮選擇集書寫に助筆す	二七九
小兒母と別る	七・三七	昇蓮房	二五六
小兒幼名	五・三〇	松苑寺	五〇・四六・五七・六一・六七
勢至	三三六	祥圓	一〇四
勢至丸	八七・八三	祥寂	一〇四
三徳殿	一六五	倡妓楨	三三九・三三三・七三・七九
上人傳〔歎西房著〕	九七五	承圓〔西林院〕	八三
正觀	五〇	承久の亂	三六七・四三五・五五・五六八
正行房	七八・九三	莊嚴記	二五五・四六一
正信房〔湛空〕	二八一	稱名と觀佛〔觀佛稱名の勝劣〕	五九
正進	九七四	勝應彌陀院〔雲居寺〕	三六
正智	二〇三・九七四	勝法房	六二・六四・三五・四・四七五・五七・六〇・六六九
正念	八〇九	勝林院	九七四
正蓮	三〇三・三六四	證阿彌陀佛	八・四三・七〇一
生阿彌陀佛	三〇三・三六四	證賀〔託摩〕	三〇三・三六四
生安子	三〇三・三六四	證空〔善惠房〕	三〇三・三六四
生福寺〔せいふくじ〕	三〇三・三六四	上人の弟子となる	三〇三・三六四
二八	三〇三・三六四	白木の念佛	三〇三・三六四
清福寺	八八七・八九三	宇都宮頼綱に教ゆ	三〇三・三六四
清淨房	五五・六〇・九八六	七ヶ條起請の署名	二〇三・五〇四・四三五・六三三・九七四
性願房	六八・七六六	配流のこと	三三四・七五・七六・八五・八三・九〇三
性眞〔正信〕	八八六	上人の臨終	五〇・五三・六四・八七・九〇一
昌西	二〇三・九七四	中陰の佛事	九〇三

移葬のこと

九〇六

上人の勸化をつぐ

三六六・四三六・九八九

往生

三三三

證西

九七五

證眞(寶地房・法地房)

上人の不足言

三二

圓明と法談

八三〇

聖教を見る

三三

上人に歸す

五四・七六三・九六八・九八九

大原談義

四七五・五七七・五五三・六〇〇・六九九・七一〇・八四四・九八九

聖光房辨長の入門

二九六・三七二・五〇〇・五九六・六六六

諸佛の世を利し(序文)

四六・五四四・六四七

諸行本願義

三八

聖教見ざる日なし

三三

聖光房(辨長・辨阿)

證眞に入門

五三〇

油山の學頭

二九六

吉水禪室に參す

二九六・三七三・六六六

上人との法談

九七・一四六・七九九

選擇集の傳授

二九六・三七三・五六〇

三心具足の念佛

三〇〇

末代の斟酌

一八七

末代念佛授手印

二九八

上人の正統傳持

八四・五九八・九九

往生

三〇〇・三七四・四八〇

聖西

九七五

聖信

四三三・四六二・六〇〇・六四四

聖道門の修行

三八

聖如房

九八

聖蓮

二〇三・五三四・五五三・六三三・九七四

鐘下房

一八七

上西門院へ説戒

三・四八・三三六・三四八・四七五・五二四・五九八・五五五・五八八・五九八・六四四・七四八・七六九・九四四・九九八

自筆の諷誦

九〇三

上信

九七五

成阿彌陀佛(角張・隨蓮)

五三四・六四四

上人の念佛を聞く

八四六

大原談義に列す

三三六・四三三・四六六・五〇五・五三三・五六七・六九二・七二二

配流の御ともす

七五・八七五・八七六・八八三・八八五・八八六・八八七・八八八・八八九・八九〇・八九一・八九二・八九三・八九四・八九五・八九六・八九七・八九八・八九九・九〇〇

生田の森に使す

八九九

夢中の教化

一〇八・四四七・三三〇・九〇七

成圓

九六七

成覺房(幸西)

二〇四・九七四

成願

九七五

成蓮

九七五

序文 三・三九・三五・三九・四七・四六・五七・五四三・五八九・六四四・六四七・

三六・七九・八五・九二

定阿彌陀佛

九七五

定生房

四九・五三・六〇

定昭

五〇

定照

三三三

定僧(波畫堅者)

二六五

定增(並覆堅者)

九〇五・九〇七

定範

四五〇・四五二・七三

定佛

八五五

定蓮房

四九九

淨阿彌陀佛

五五・六〇・八四五・九八六

淨圓房

九七五

淨憲

七六六

淨賢

九三三

淨勝房

九三三

淨心房

一八〇・一八三・一八四

淨土一宗の諸宗にこえ

一九四・九七五

淨土決疑抄

二八九

淨土五祖像〔五祖像〕

二五・三三・四四・五七・六五・四二・七一・七八・八六・九九七

淨土三部經

四五

淨土宗を立つ

二・三四・七・三〇・三四五・三四七・三七九・五五・五七・五九六・

七五・七七・七〇

淨土宗の心

二五・三三・六三・六九・七〇三

淨土宗略抄

九七五

淨土の一門

一三三

淨土門の修行

三六

淨然

五三七・六一〇

淨閑房

六八

淨蓮

八八五

貞慶

二六六・四七五・五七・五三三・六〇・七二・八〇・八四四・九六

乘願房宗源(竹谷)

二七五

乘臺

三三

常念を證とす

一〇六

靜惠(聖護院)

五五・六二・七五・七三

靜賢(竹林房)

七八八

靜西

二〇四

靜嚴(竹林房)

三三・五八・〇・四七五・五七・五三三・六〇・六二・六六・九七〇・

靜心

七五三・七五四・七五三・八四四・九八

靜忠

三三

靜然

六六

靜遍

六六

白河の禪房

二五七・四九・八六

白木の念佛

二五三・六三・七九

白木の念佛

三〇三・六六四・六三

白木の名號

三五

臨終に際して

四七・五〇・五三・七五・九四

白幡二流

四・三四一・五八・五四四・五九八・八七

中陰の佛事

二四九・三五〇・三五・四四四・四四五・四七四・四九・五〇四・五二九・六四二・

心圓房

七二八

改葬・茶毘

二六六・四五一・四五五・六四四・七三・七三・九〇二・九六

心光

四四九

上人の教をうけつぐ

九八九

心蓮

九七五

往生

二七〇

信惠

九七五

信西

九七四・九七五

信圓 (菩提山)

四八

信寂 (西仙房)

二六六

信空 (法蓮房) (二階房)

二六九

信心おこらず

九八

上人の弟子となる

六六〇・七四五

信蓮房

二四九・四四四・四九五・五一四・五二四・五二六・六四一・七六・八五五

圓戒相承

二六九・五一六・五四〇

眞阿彌陀佛

六八

小蛇の奇瑞

三〇・三五・三四・四七・五九・七六・八三・九八・九九

眞影 (正覺房)

六〇

上人に近侍

八七

眞影 (影像・御影)

四三・四八・四七・五五・五七・六六・

上人の放光を拜す

三六・三七・六四〇

隆信の筆にて蓮華王院に納む

七五〇

白河禪房

五五・六〇・七五・七五

隆信の月影御影

七五〇

教阿彌陀佛のこと

一〇七・三三・七〇

信實の筆知恩院へ

三三・七六

選擇集傳授

三五九

勝法房かきて銘を所望

三七

七ヶ條起請の署名

三〇・五五・六三・九四

或る人寫して銘を

三七

配流に際して

三六・四三・五五・五六・六九・八五・九九

正信房湛空ゆかり

二七三・五〇・五八・七三・七三・七三

勝尾寺へ衣裳を運ぶ

三七・四九・五八・五八・五二・七三

親鸞ゆかり

六四・六五・六四・九八

桑原左衛門入道の作

津の戸三郎の所望

信州善光寺安置

人毎に留む

讀文

眞觀房(感西)

選擇集の執筆

大胡消息の執筆

往生

眞顯

眞性(座主)

眞如堂

進西

親西

親鸞(緯空・善信)

親蓮

深心

神圓

尋玄(本蓮房)

ス

すけをさゝぬ

崇徳院御廟

四四五
四八・七〇四

九〇七

四六三・五三三・五八二・七三三・七六四

三七・六四・六五・七五・八六六・九一九

五〇・三七・三六四・六八四

一五三

三二七

三九

一〇一・四〇・四九

八四

九七四・九五

五二四・五五五・六三三・九七四

六八・六九四・八六五・八四〇・八九九・九六九

二〇三・九七四

九七五

九七四

三六・四三・四四・五四・五八・五九・六六・六〇

一一三

七二八・九三三

頭光現はる 三六・四三・四四・五八・五九・六六・七〇・七一・八一・八三・九〇・九八

頭光踏蓮の奇瑞 三六・七五四

數軸の畫圖 三三・三九・三三六

瑞相眼前に 三三

隨蓮(成阿彌陀佛) 九五六・九六三

鈴虫

セ

生福寺・清福寺(シヨウフクジ)

西山義 六七三

西山門 三六六

青龍 四七一・七九五

青龍(蛇)出現 三四四・五八六・五九四・七五五・九一〇

清涼寺參籠 一一・五〇・五九五

聖覺(安居院) 八〇

上人の化導に歸す 七九・七九八

上人の教をうく 七六三

上人を敬ふ 七六三

月輪殿にて 四九

瘧病祈請 八二・三三・四三・四八・五八・六四・七〇・七六

熊谷とのゆかり 一六六・一七五・三九三

明禪と手つかひて 二六三

大原談義 九四六

天下の能説

八五

登山狀

三〇八

配流に際して

八七五・八八五・九七九・九二九

一切經開題供養 三三六・三四四・四八八・五〇・五八・五七・六〇四・七三三・七六〇・

八九六

上人の臨終に際して

五〇九・五二〇

眞如堂にて三年忌營む

八四

中陰の導師

二五二・四四四・四七七・五三四・五七九・六四三・七九・九三

鎮西義を正流と認む

八四・三三三

自記

七四

上人傳

七九

但馬宮に念佛往生を説く

八三

往生

八四

勢觀房 (源智)

五・三三〇

勢至 (幻名)

三三六・三四四・九九九

勢至丸

三三・三五

勢至來現

三三七・三三九・六六・六七・九七・九八〇

勢至の應現奇跡

九三・九三・九七

誓福寺 (讚岐) (生福寺)

一〇三

千部の法華經

三九・二八・九七四

仙雲

五七・五三・六〇・六九

仙基

二〇四・三六

仙空

二〇四・三六

宣旨の二つ

二六

專修正行

三三

專念

九七

選擇本願念佛集

三三

撰述 五〇・三三三・三六六・三六六・六四四・七五・七九・八〇・

三三

執筆者 九七・九八・九九

三三

助筆者

三九

源空が所存のせ侍る

二六五・三三三・四八・七五・九九・八九・八九

親鸞に授く

六四・六四・九七

辨長に授く

二九六・三七・五〇

隆寛に授く

八五

假名書上下

八五

假名書

八五

偏執と見る

六・二五・二五・四九

破文 (顯選擇・彈選擇)

六五・七九・九九

歸仰

二五・二七・八六

印版焼かる

九八

簡要

七

善惠房 (證空)

七・二三

善光寺

六七

善弘 (圓明房)

四〇・七二

善心坊

四〇・七二

善信〔親鸞〕 五四・五五・六三・五〇・六四・七六・八六・八七・九七・九八
善信〔圓明〕 五四・八六

善禪房〔西意〕 六八・七六・九六

善通寺 三三・四八・四八・五八・五三・七八

善導和尚

觀經疏の文

二・三六・七九六

觀經釋義

二七・二八・三九

教示 八一・〇一・一一・二〇・二六・三三・三九・八一・九二・二六・三六

高祖 三・三四・三九・五三・六二・八七・二〇五・二六二・七九四

彌陀の化身

一五六・一七二

半金色にて來現 三三・三四・四四・五〇・五九・五七・六六・七四・

七七・八二・八五・九五・九九一

夢の善導 五〇・九・五三〇

御影 八一・五五・四三・四二・四八・四七・五三・五四・七〇・七四・

七九・六六・七七

善導寺建立 二九九・三七三

善峰寺 六六

善明〔圓光坊〕 九五

善蓮 一〇四・九七四

禪空 二〇四

禪光房 七六

禪寂 七六

禪勝房 九七四

吉水禪房に參る 二八六・三六三・五三三・六七六

上人の教をうく 一八七・三七九

上人の消息 二八七・三三三・七八〇

隆寛尋ぬ 二九二

往生 二九二

禪忍 一〇四・九七四

禪林寺 二五五・二五七・四九八

ソ

宗慶 二〇三・五〇四・五五五・六三三・九七四

藏俊 一一・二六・三四・四七・五〇・五二・五七・五九・七三・七六・七七・七八・

七九五・八三三・八三三

増圓 四九八

俗をのがれ 六

俗名〔上人〕

藤井元彦 三五・三六・八七・九〇・九二・九五

藤井元彦男 六八

源元彦 四三・四三・四六・五〇・五七・五七・七二・七三・八〇・八五・九八

源元彦男 七六

姓名〔缺〕 九七

俗名〔門弟〕

藤井善信〔親鸞〕 六八・八七四・九五九

禿〔親鸞〕 九八

枝重(成覺房)

一七四

大勸進職

一九・三五・五三・五三・六七・七九

原秋澤(空阿)

九七四

大經釋

九四

山遠里(隆寛)

九七四

大蛇の身をうく

一九・三四九・七〇・七九七・八三六・八九

續選擇

三二七・四四九

大乘戒(圓戒)

二九・三五六

蘭田の太郎

一六三

當麻曼陀羅

一三

夫以、衆生の沈淪無量(序文)

一五

高倉天皇圓戒を受く

四三・三四七・四六・五五・七三・七七・七九・九四・九八

夫以、世を利し機を鑑み(序文)

三三九・三五・六四・五

高砂の浦

三〇・四二・七六・八六

夫以、我本(大)師釋迦(序文)

一五〇

高階保遠入道

三三・四八・四八・五七・五七・五九・七八

尊願(蓮上房)

一八四・四四九

高階時遠入道西仁

四一・六三三

尊西

一〇一・五〇・五五・六三・七四

高橋入道西忍

八八七

尊性選擇集の助筆

二七九

高橋入道西佛

九三三

尊成

一〇三

高島少將

五八・五五・七〇

尊淨

一〇三・九四

隆信(戒心)

三三

尊忍

一〇四・七四

上人に歸す

五二〇

尊佛

一〇四・七四

頭光踏蓮のこと

三六・三四八・四二・四八四・五四・五八・五五・六六・六五

尊蓮

一〇四・七四

影像を寫す

四三・四三・四七・五七・六六・六七・七三・八〇

夕

上人に近侍

六八九

往生

二八

たゞ人にあらず

九

竹谷(乘願房宗源)

二八三

多念の行者

一九〇

但馬宮の念佛往生

九四三

茶毘

二六七・四五・五二・六四・七三・七六

忠通(法性寺殿)

九四三

大阿

一〇四・七四

立石家

九四三

玉日の前

九六一

沈海の奥

九二一

誕生(上人)

四・三九・三六・三〇・五八・六五〇・七七・七四一・七六九・七七一・

誕生寺

九四六・六五五

航空

四八五・四九七・五〇四

湛空(正信房・公全)

二七三

上人の弟子となる

五二五・五九

圓戒のこと

二六四・二七三・五二

明禪の善知識

三〇四・三三六

隆信の墓所に念佛す

四三三・四八七・五〇六・五五五・五九〇・六三〇・七三三・七五八

上人の放光を拜す

二六八・五〇三・七三三・七三三

配流にお伴する

三〇三

遺骨を迎ふ

二七三

聖光房の義を證誠す

九六八

往生

五七

湛豪

二七五・三三三・四〇〇・七三三・九〇五・九七七

湛與

九四八

彈選擇

二四八・二四八・三三五・七六六・九四六・九四六・九四六

千鶴の前

九四八

知恩院

二四八・二四八・三三五・七六六・九四六・九四六・九四六

知恩傳

七五〇・七六六

智恵を極めて生死を離れ

二九二

智恵第一のはまれ 二〇・三四五・五〇三・五四四・五五一・五八七・七三三・七四三・七三三・

八〇〇・九〇

智圓

九七五

智海

四七四・三三七・五五五・六〇〇・六六九・七二一・八〇一・八四九・九六六

智鏡房(觀覺)

三三七・三九

智者は智者にて生る

六七四

智心傳

六五九

智湛

七

竹林房(靜嚴)

六五九

父の遺言

六五九

茶筒茶筥

八三二

茶筥をさゝげて

九六六

中宮

三

蝶いでゝ

六九

長慶

三三六・四元

長西(覺明房)

三三三

朝恩といふ

八四三・八四六

重源・重嚴(俊乘房)

一〇三

澄阿

三九・三三

澄雲

二六九

澄慮

一五・三三・四一・二五・九〇・六四・八五

澄西

二〇四・六八・九七四

長樂寺 (東山)

六九六

長樂寺 (讃岐)

九三三

勒免 三六・三三・四三・四六・五八・五八・五八・五八・七三・七三・七三・八〇・八〇

八九五・九六・九七

鎮西の修行者

三七五・六九・七六

ツ

つくり道にて

法性寺殿にあう

八・四三

月輪殿にあう

五四七・五九・六五・八〇・八五

つねの御詞

二一・三四七・四八六・五〇五・五三六・五六六

津の戸三郎爲守

上洛

一七・三六

不斷念佛を行う

一八〇

往生の決意を示す

三五一

善恵房にたづぬ

三〇六・三六六

念佛往生の道を承る

一七六・四八・六二・七四

上人よりの消息

一七・三九・三九・四八・四八・七〇

武州より讃岐へ書状

三三三・四八・七〇

往生の素懐

一八・四六・七六

月輪殿 (兼實)

つくり道にて小兒にあう

五四七・五九二・六五八・八〇・八五

歸依の一因

八

勢至の奇瑞

八五

頭光踏蓮

三六・四二・五八・七四・七九・九〇

圓戒をうく

五・九六六・九七六

北政所へ上人返状

六

熊谷蓮生のこと

一六七・七三・九一・六四

佛事

六七

法性寺殿忌日の佛事

六八

御不審を尋ぬ

一七・三六

浄土の法談

三三・三七九

羅城門礎のこと

三七八

瘡病祈請のこと

八・三三・五四・六四・七四・六六

選擇集撰述

五〇・三三三・三三六・三三九・三六四・六四四・八〇三・九九九・九八

専修僧を相具す

九八

念佛停止の宣旨

九七三

座主への消息

二〇五・四〇九・三〇・六七・六九・六九

往生

三三三・九七六

筑紫義

三〇三・三七四・六八七・七四六

土御門院

四三・一〇三・七三・七三・九〇三

經宗 (大炊左大臣)

五二・六八

角張入道 (成阿彌陀佛)

テ

敵人をうらむ勿れ

天台大師童稚

天童園繞

天人のかたち

天福寺(上妻)

ト

鳥羽(京の)

鳥羽より船に

土葬の儀式

度阿

登山 九・三四三・四七〇・五五五・五九三・六四四・七二七・七九三・七九七・七九八・八〇〇

八三

登山狀

東寺の僧

東大寺

戒法

脇土造立

炎上

大勸進職 一六・三三三・三三二・三三三・三三三・三三三・三三三・三三三・三三三・三三三

上棟に念佛の他力を會得する 九・七七八

大佛殿供養

東大寺上人(重源)

道阿

道直

導直

道感

導感

道遍(遊屋入道)

道也

導也

導空

道顯

導源

導西

道緯

導匠

徳阿彌陀佛

時氏(平)

時國(漆時國)

遺言

最國

辰國(漆間)

時貞(奈良本金吾)

三三三

九七八

四四三

一〇〇一

五二四・五五五・六三三・九七四

一〇〇一

九七四

一五三・二六六

一〇〇一

九七四

一〇〇一・九七四

一五・三九

一〇〇三・九七四

一〇〇三・九七四

三九・六一七四・一七三・三二・三六二

九七五

九七五

二五五・六四三・七三三・八〇六

五・三三六・三三七・五九九・六三三・七四二・九七七・九八九

六・三三六・四六九・五三八

六四九

九八四

八二〇

ナ

奈良法師

奈良本金吾

中の川少將〔實範〕

長明〔源〕

長房

七日七日の佛事

習ひたる智恵は

南都歴訪

九六七

一六・二〇・三四・四七・五九・六三・七四・七八・八三

五・三六・五八・五九・六五・七九・九七

二五五

二四九・四四四・四九五・五四・六四一・七六・七八一

二六九・三六

二二

ニ

にしの壁に

二位〔鎌倉〕

二箇條疑問事

二階房〔信空〕

二字を奉る

二十五三昧

二尊院

移葬

上人の寶塔をたつ

浄土五祖像

上人の御影

五

一五〇・三六二・八〇六

三七一・六六

六二三・七〇・八五八

二二・四・〇・七八

三二

五三四・六四四・七三一・八〇七・九六六

二六八・七三三・七五三

二九

二七三・七三三・八六六

二七二

二度まで殿上へ

二品禪尼〔鎌倉〕

西山の草庵

西山の廣谷

日所作

日法第一の美僧

入信院

女人往生の願意

如進

如法經

仁和寺

忍西

一五〇・一八三

一六一

三五

一三一

五五・五九

七六六

九四・三八三

二〇三・九七五

三九・四四・五七

二〇四・九七四・九七五

ネ

念阿彌陀佛

念空

念西

念珠より光放つ

念生

念佛一行をつとむ

念佛往生修行門

念佛停止

念佛祕密經

二四六・三六・四四・五一・五三・六四〇

九七四

二〇三・九四

三六

二〇四・九七四

五三

三〇一

二〇一・二四四・五六〇・六七七・七五五

三三三

念佛房 (往生院)

三六・五〇・五三・六〇・九五・九六

念佛申し申しする

一一二

念佛要文集

四三三

然阿彌陀佛

三〇三・三七四

能信

五・七〇・三三・四七六・四七九・六八一

信實 (左京大夫)

一四九・三三・七六六

の伯母

一四九

範光

三三・四八

はやくりの數反

七・六九〇

破戒の念佛

二九一

波羅門僧正

元

配流 (上人)

三三・三三・三三・四三・五五・五五・五七・六六・七〇・七七・七六六

七三・九二〇・九三三・九六

親鸞

六八・六四・九五九・九七九

門弟

六三六・六六・九三三

隆寛

二八〇・七五五

秦氏

四・三九・三四〇・五四三・五九・六四九・七二・八〇八・八五・九七七・九九九

上洛

六三三・七四七

八幡の御正體

二四七・三七・四三・五九・六四一・七八

八幡の再誕

六五一

半金色の善導

三・三六六・四七四・五〇・五九・五七・五九七・六三・七七〇・七四〇

範晏

九七・八二・八五・九九一

範宴

六四四

範宴

六三三・六六五

萬機を攝す

二八九

七

ひとりだちをさせ

一一三

肥後阿闍梨 (皇圓)

六四

毘沙門天王

三九・六六

日吉社

二五

東山吉水

六四七・七六

竊以、眞如幽玄 (序文)

四四三・五〇・五二・七三・六四

人毎に影像を留む

一一三

百四十五ヶ條問答

九八

百八の念珠

一三

百萬遍

一三八

白毫

二六五・四九九

廟堂破却

三三

廣谷 (西山)

木

フ

ふりふり百萬遍

三七六・六〇

不淨にて

三二

不斷念佛

五・四・一八〇・三三・三七・三八・六九・四七五・五七・五八・五四・

不斷念佛三昧

五七・六七・六〇・六〇・七三・七三・七一・八〇・八四

伏以諸佛の世に出づる(序文)

五・三三・四六・五七

藤井元彦

三五・三六・八七・九〇・九二・九五九

藤井元彦男

六八・七六六

藤井善信

六八・八七四・九五九

兩幡

四・六五〇・七四一・七九・八〇・九・八九四

佛心

一〇三・五二四・五五・五三・六三・九七四・九五五

佛眞

一〇四・九七四・九六

ハ

別時念佛

三三・二一〇・一六四・三三四

別傳記

七七

別傳に云

五五九・六五七・九六

別の様なし

一一

辨西

二〇四・九七四

辨長(聖光房)

木

母儀の上洛

六三三・七四七

菩提寺

七・三三七・五五・八六・八二一

墓所

二四七・九七八

墓堂

九六八

法阿

二六六・二七二・四三三・九七五

法住寺

四三・六〇・三三七

法性寺

九六七

法性寺殿(忠通)

八四八・六三・三六・三四二

法性寺の小御堂

三三七・四三三・四六六・五〇五・五七七・六一八・四八・七三・八七

法勝寺

八・九二〇・九五

法地房(證眞)

一〇八

法爾の道理

一一三

法爾法然上人

七四四

法然上人(源空)(命名)

三・六一・八四・一〇三

法然具足の人(聖)

四三・五九六・六五・八二

法然道理の聖

一〇・三四四・五九四・八二・九九〇

法然房(命名)

一〇・三三・一〇一・二五・二五・二五・五六・七九四・八二・九三

法然(源空) 本地身大勢至の文

三・三三・九七

法々(住蓮?)

九六

法本房

六八・七六六・九七〇

法門は牛角の論	六・三〇	松虫	九五・九三
法力房(蓮生)〔熊谷〕		松山	五四・八九
法蓮房〔信空〕		満月室に入る	九
寶泉房	三六		
寶持房(法持房)〔證眞〕	三・七〇		
寶塔をたつ	五〇・八三		
寶蓮房(法蓮房)〔信空〕	七三		
報身報土	二七	御影(影像)〔眞影〕	二五
房籠り	五〇	御影堂	
望西樓	七五	彌陀如來の應現	三四・五五・六六・七七
堀川太郎入道	二四・四六・七七	水尾山樵夫	四九三・五一・五三・六四〇
本願寺	九五	道盛	八〇・九〇
本地身大勢至	六八・九六・九七	光親(藤中納言)	二三・三六・四〇・三三・三四・四三・四九・五三・七三・
煩惱の所爲	五	源光忠	七六・八五・九七
		源元彦	四三・四三・四六・五五・五七・七二・七三・八〇・八五・九八
		源元彦男	六二・六七・八八
		耳四郎〔教阿・天野四郎〕	六二・六七・八八
		妙音院(師長)	三
		妙覺房	七六
		妙鶴尼	七六
		妙行業記	三六
		妙眞尼(伊豆國走湯山)	一五〇・四〇三
		明雲	六一
		明惠〔高辨〕	
馬淵	八五		
末代念佛授手印	二九		
末法燈明記	三九		
末法萬年	六		
松蔭の硯	九三		
松殿(基房)	四		
松殿(天王寺靜尊)	二四六		

マ

三

明圓

八四・八五

明禪

△

山門の英傑

三六

選擇集を見る

三八・三七

上人に歸す

四五・七五

散心念佛の事

八三・六三

信空と法談

二六九

正信房を敬ふ

二三三

配流を見送る

八五

往生

二六四・四一・五二

明遍

高野山籠

六

上人にあふ

四四・五三・七三

天王寺西門病者の夢想

六・三五・六八・七六

はやくり念佛

六・三六・六〇

いかゞして生死を離るべき

三三・五三・七四

選擇集のこと

七・二五・三四・五五・六二・六八

大原談義

四七・五七・五八・六〇・六九・七二・八一・八四・八六

配流を見送る

八五

上人を敬ふ

七三・六八

遺骨奉安

七九

三昧發得記の披見

三三・六四・七九

七九七・九一

四

四

五九

五六・五四・七五・八六

四六・七七

三三・四八七・五七・五六・六三

九二

×

目鼻をとり放ちて

六

眼より光を放つ

八・七三・三三・三〇・七一・五六・七〇

命名

六五七

圓明房善弘

八九

善信圓明

一〇・三四・四七・五九・六九・九四・八一・九〇

法然房源空

三・三九・三六

滅後(釋尊)二千餘廻

三四・五四三

二千八十年

六四八・七六

二千八十一年

四六・五七・九三

二千八十二年

五九・八一

二千八十四年

滅後(上人)の法難

九五

七

元國

基親

基房〔松殿〕

盛親〔見佛〕

文殊像一體

文殊御前

文殊丸

ヤ

やまとうた〔和歌〕

彌次郎入道

山桃〔楊梅〕法橋

ユ

有西

有實

祐尊

遊行聖

遊女教化

三五・三三・四〇・四九・六〇・六三・七二・八〇・

五

一八・五〇

四四・四六・七六

八・三四・四七・六六・六九・七三・八六・九四・九九

八〇

八〇

一五

六七・六〇

九五

九五

八五

八〇

三三・七七・七九

遊蓮房(圓照)

唯阿彌陀佛

唯觀

唯願

唯實

唯信抄

惟阿

惟西

行隆

夢(弘法大師と對面)

夢の記(蓮生自筆)

夢の善導

よはき三心具足

余が遺跡は

餘行をすて

永觀

切名(上人)

小矢兒

三德殿

生安子

勢至

勢至

二八

九七

八五

一八〇・一八三・六一

八八

八五

八五

二〇・九七

二四・五三

一九

一〇

三三・三三・三七・四七・五〇・五九・六九・六六・六六・六九・九九

二五

二五

二四・七五

二四

二〇

二〇

六・三六・四一・四七・六五

八七

八〇

五・三〇

勢至丸

三六・九四

文殊御前

八〇

文殊丸

八〇

圓明房善弘

六七

善信圓明

八三

様なきを様とす

一〇八・三三・四七・五三・六五・九七

吉水

しづかなる地

二五

黒谷を出でゝ住む

三四六・三六・五九・六七・九七・九八

一草菴(母の居所)

六三・七七

親鸞訪ぬ

八六

墳墓をつくる

七五

吉水御房

五九・六三・六二・七二・七五・七四

尼女房參集

九・三三

吉水禪房(室)

五・一五・七六・六四・七七

良清

二五〇・四四

善峰

四六

善峰寺(ぜんぼうじ)

三六

頼實(中山相國)

一七五・五・九八

頼朝

一七五・五・九八

ラ

羅を切る

九三

二七八

羅城門礎事

三七・六〇

禮讚(六時禮讚)

五二五

リ

理眞(東大寺)

一九七

立西

九七五

隆寛

功德院皇圓

五四八・五二・七四

上の門弟

二七七・四五・九八

根本中堂安居の導師

二七八

長樂寺來迎房にて別時念佛

二七九

暗夜の放光を拜す

三四

選擇集授かる

二二九・四四・四八・五二・五八・五六・六六

顯選擇

二二五・三三・四〇・九五

大原談義

八四六

越後の念佛義

五七五

上人の配流を見送る

七三・八五・八六・八八・九二

上人の往生に會す

二九四・四九五・五〇・五三・六四〇

上人初七日の奇瑞

二五二・四四・四九七・三四・六四・七九

五七日の導師

二四六・四三

上人入滅の後

七六〇

配流

二六五・七三・七四・七六・七九・七七

羅中吟

二八〇・四四・七五・九〇七

但馬宮に念佛往生をとく

往生

二八三

隆眞(佛頂房)〔定照〕

二八一・四三三・六五五・九〇七

龍〔櫻の池〕

九七七

龍神

三二

龍禪寺

五五三・七七二・八〇一・八四四・八六四・八六六

了惠

七六四

了西

九七四

良宴

三九

良快(妙香院)

七四・三六六・四七三・七三三・九〇六

良信

一〇四・九七四

良清

四九七・六四三・七三九

良忍

一一・三四・六四

靈山

五五七・六二五

靈山寺

三三・三七一・四七・五〇〇・六七三・七五〇・七七二・八〇三

瀧山寺

五六・五五七・六二一・七五〇

琳阿彌陀佛

五四六・五五〇・五五五・五六九・五七五・五七九

臨終

一三三・二四一・二八五・二八六・七六〇

臨終の一念は百年の業に勝る

二九〇

ル

流罪(刑)

三三五・八〇四

流罪勅免

三三六・七一

蓮惠

二〇四・九七四

蓮花王

六五〇

蓮華花王院

四三・四八・四四・五五・五六・六六・六四・七六・八〇・八三

蓮華の中にて念佛

三六

蓮慶

五五三・六〇七・七一九七四・九六六

蓮光房

七七一・九六六

蓮西(熊谷)

三九二

戀西(熊谷)

三九二・六七四

蓮西(七ヶ條署名)

九七五

蓮叔房

三〇一・三七四・九七五

蓮生(實信房)〔宇都宮彌三郎〕

二〇四・五四・五五・六三・九七四

蓮生(七ヶ條署名)

一五三

蓮生(法力房)〔熊谷次郎直實〕

九七四

蓮性(小屋原)

九七四

蓮定

九七四

蓮乘

九六六

蓮臺房

一五八

蓮台野

八五一

蓮智

九七四

蓮佛

一六五・九七四

蓮仁

九七五

口

六萬遍

二七

六時禮讃

四四・四五・三四・三九九・三五六・四八〇・五五八・六六一・七三三・九七五

六條川原

三三四

ワ

わさわい(過) 三女より

五五・五五九

和田千僧三昧

八八四

和歌(上人作・やまとうた)

一九・三三九・三七七・四三四・四八三・五〇七

五七・五八・五三三・五八六・五八一・五四三・五五七・五六六・六三三・六三九・六七一

七六〇・六四四・八六六・六三三

一、法然上人傳記 卷之三、八、一

一、四 卷之二、三〇

一、四 卷之二、三〇

一、創設古學道場 卷之二、三〇

一、法然上人運世畫圖 卷之十八、卷之三、三〇

三、法然上人關係の文化財目錄

一、法然上人行狀繪圖 卷之十八、卷之三、三〇

圖 寶

第一版 附卷 附

第一類 繪卷物

國寶

一、法然上人行狀繪圖 四十八卷

京都市

知恩院藏 昭和三〇・二・二

(重文 明治三二・八・二)

重要文化財

一、法然上人形狀畫圖 四十八卷

奈良縣當麻

興院藏 明治三四・三・七

一、拾遺古德傳繪 九卷

茨城縣瓜連町

常福寺藏 明治三六・四・一五

一、同 殘缺一卷

茨城市鳥栖

無量壽寺藏 大正六・四・五

一、同 殘缺一卷

新潟縣小千谷市

西脇濟三郎氏藏 昭和九・一・三〇

一、法然上人繪傳 殘缺一卷

東京都芝

增上寺藏 明治三二・八・一

一、法然 聖人繪 殘缺一卷

二、同 殘缺三卷

一、法然 上人繪傳 殘缺一卷

一、同 殘缺一卷

第二類 掛幅

重要文化財

京都市 知恩院藏 昭和二・四・二五

京都市 堂本四郎氏藏 昭和三〇・二・二二

足利市 田村彦七氏藏 昭和八・一・二三

國立 東京博物館保管 昭和一一・五・六

一、法然 上人繪傳 三幅

二、同 二幅

岡崎 妙源寺藏 大正七・四・八

三重縣丹生 西導寺藏 大正七・四・八

第三類 御影

重要文化財

絹本着色

一、法然上人像 一幅

絹本着色

一、法然上人像 一幅

木造

一、圓光大師坐像 一軀

第四類 文書

重要文化財

紙本墨書

一、選集 一冊

一、法然上人七ヶ條制法 一卷

(元久元年十一月七日)

茨城縣瓜連町

常福寺藏 大正五・五・二四

京都市嵯峨

二尊院藏 昭和二四・五・二七

奈良縣當麻

輿院藏 大正二・四・一四

京都市

廬山寺藏 明治四二・四・五

京都市嵯峨

二尊院藏 昭和二四・二・一八

自 跋

法然上人傳の正本として『明義進行集』が發見されて間もなく「信瑞の上人傳と明義進行集第一」の論文を書いて『佛教學雜誌』大正十一年八月號に掲載され、同年秋には望月信亨博士より醍醐本の法然上人傳が未刊の時に特に書寫を許され、其れに基いて醍醐本と信瑞傳との關連考證論文を續いて發表したのであるが、まだ京都大學文學部の學生時代であつた。法然上人傳の研究に携つてからはや四十年は夢の如くに経過している。其の間に上人傳の新史料が幾つか發見され佛教史學の研究も随分進んで來ている。

私は大正十三年十月から三浦周行教授御指導のもとに京都大學寄託近衛家文書の整理をすることになつたが、そこで永享九年書寫の『黒谷上人繪詞拔書』を發見した。

翌春『法然聖人繪』殘缺一卷が知恩院へ寄進されて拜見し、其の中から珍らしい史料を見出して學界へ公表することとなり、其れが機縁で昭和二年五月内藤湖南、澤村專太郎兩先生の御紹介で神戸川崎家に於て同類三卷を觀るを得た。共に「釋弘願」の奥書があり、再び『史林』に紹介し爾來「弘願本」として非常に重要視されることになつたのである。丁度其の頃高田專修寺所藏の『法然上人傳法繪下』が提供されて來た。全く陸續という感じであつて私の法然上人傳研究への情熱が一段と昂じたわけである。

以上の新しい上人傳を一々解明し比較論考する間に副産物として藤懸靜也、澤村專太郎兩先生の既に發表せられている法然上人繪傳に關する論文に間違いがあつて訂正するような立場に置かれたのである。兩先生には失禮な仕

儀ではあつたが、私の其れら研究論文は認められて新しく二つの國寶（現在の重要文化財・知恩院藏の弘願本と西脇濟三郎氏藏の古徳傳繪）が指定されることになつたのは欣快にたえなかつた。

私は一往回顧して感謝したい。知恩院什寶係、知恩院史編纂主任、執事（遠忌局長・教學部長）と前後二十餘年知恩院に奉仕する間に法然上人關係の資料蒐集に随分と恵まれたものである。即ち勅修御傳（國寶）原本對校、什寶調査の便宜、歴代事蹟や日鑑（日記）の探索、上人降誕八百年記念事業として全國に散在するあらゆる上人繪傳と御影とを一堂に集め親しく其れら門外不出の祕寶に接し、且つ寫眞撮影するの機會に恵まれたことである。

また京都大學の文學部と付屬圖書館に籍をおくことは是れも二十餘年、其の間に諸先生に長い間親しく御教示を給わり、更に史料や圖書類を自由に檢索し閱覽出來たことは、私の生涯は實に幸福であつたと、只管感謝するばかりである。

私は以上の如き恵まれた境遇にあつて餘暇を利用しては法然上人傳研究に關する論文を既往に遡つて著述、雜誌報告の中に就いて一々検討し續けたのである。また新しく發表せられる法然上人傳史料と其の論文とには絶えず注意して來たのである。『國華』誌上に「法然上人傳法繪殘缺」が發表せられると直ぐあたつて見たが、其れは筆者の見當外れで『拾遺古徳傳』の第三本該當の殘缺であることを確め、早速訂正を申入れておいたが、其れが御縁となつて同類殘缺本の尙お存することを確め得ることにもなつたのである。

また古典本の特別展覽會にも注意して法然上人關係のものがあはせぬかと探しつつづけて來た。なかなか無いものである。それでも大阪市立美術館で八尾市慈願寺藏の應永十三年書寫の古徳傳殘缺八冊を知り、佛教大學圖書館で上人傳目錄の中に「拾遺古徳傳九卷・元亨四年・大阪府願得寺所藏」とあるを知り、早速北河内郡門眞町の同寺

を尋ねたところ、元亨四年六月十四日というは原本の奥書で實は天文二十二年釋實悟の寫本十冊にめぐりあえたのである。年代は下り第一冊は少しおくれた年代の補寫ではあるが九卷完本であり、其の内容は茨城縣瓜連常福寺所藏の重文指定本と四、五箇所異つてゐるという收獲を得たのは極めて最近の事である。

私は徳川達孝氏舊藏（現・足利市田村彦七氏藏）の法然上人繪傳殘缺一卷（國華誌上紹介）が琳阿本と通稱される東京芝妙定院所藏の『法然上人傳繪詞』と内容が共通してゐることをつきとめた。また知恩院所藏の『道綽禪師曼陀羅』の題名を『法然上人曼陀羅』と訂正したり、同寺所藏の『法然上人七幅繪傳』の中から二河白道の譬喩の圖を抽出して學界へ紹介もして來た。然し其れらは個々の上人傳解明である。

私は更に是等數多い法然上人別傳や同繪傳の縦と横との關係、即ち一體どういふ徑路をたどり作られたものか、原流はどこでそれがどう流出し作成したものか、そしてお互がどう關連してゐるかといふように法然上人傳の系譜のよなものつくりたいと考へたものである。

そして同一人にして異名もしくは異字、同一事件にして年月日の異り、特殊文章の引用と流動といふものを考究し順列組み合せ、また分解し、同類項を一まとめにする方式も幾度か立てて、更に同時代の他史料と照合せしめもして漸く系列をととのえることを得たのである。本書の後篇付録に掲出した法然上人傳年表と上人傳全集索引は實のところ隨分と其れに役立たせたものであることを述懐する。

尙お掛幅裝繪傳が繪卷にたよつてつくられてゐることに目をつけた。そして掛幅繪傳がどの程度に卷子本の内容をとり入れているか、更に發展して別の豎幅にうつり作られてゐる徑路と其の作成緣由をも併せて出來うる限り紹介することに力めて來た。

本書の出版に際し京都大學名譽教授西田直二博士、大阪市立美術館長望月信成、泉大津市細見良、文部省文化財保護委員會事務局宮澤武司の諸氏から御厚意をよせられたことと、また貴重な繪傳類の公開を許し寫眞を提供下さつた所藏者各位の恩恕に對して甚深の謝意を表する。また寶田正道、田村圓澄、阿川文正の諸君が上人傳研究に眞摯であり大いに啓發されることの多かつたことを記して敬意を捧げたい。

今茲三月一日から七日まで總本山知恩院で元祖法然上人七百五十年遠忌法要が奉修さる。そして其れに先だつて上人にまた和順大師と加誼さる。光榮極まりがない。其れを記念して私は今までの研究成果をまとめ上梓した此の一本を、恭しく祖師の御影前に捧げ得ることの幸いを深く感謝する次第である。

昭和三十六年二月二十七日

和泉綾井郷 淨土宗別格城蹟山專稱寺にて

知恩院宿老 司教曰講 井川定慶 謹誌

昭和三十六年三月一日印刷
昭和三十六年三月七日發行

不許
複製

編集兼
發行人

井川定慶

印刷者

京都市下京區西洞院通七條南
内外印刷株式會社
代表者 坂本起一

頒布所

大阪府濱寺局區高石町綾井專稱寺内

法然上人傳全集刊行會

振替口座大阪三六二八二番
電話 堺 〇一八九〇番

法然上人傳全集前編本朝 目次

法然上人傳全集前篇本傳 目次

第一集 勅 傳

- 一、法然上人行狀繪圖(勅傳)
- 二、黑谷上人繪詞拔書(近衛本)
- 三、法然上人繪詞卷第一
- 四、法然上人傳記(九卷傳)

第二集 傳 法 繪

- 一、本朝祖師傳記繪詞(筑後本)
- 二、法然上人傳法繪流通(國華本)
- 三、法然上人傳法繪下(高田本)
- 四、法然 聖人 繪(弘願本)
- 五、法然上人傳繪詞(琳阿本)
- 六、法然上人傳(増上寺本)
- 七、拾遺古德傳繪(常福寺本)
- 八、法然上人傳(十卷傳)
- 九、知 恩 傳

第三集 雜 と 抄

- 一、源空聖人私日記
- 二、法然上人傳記(醍醐本)
- 三、黑谷源空上人傳(十六門記)
- 四、法然上人秘傳

- 五、正源名義抄
- 六、法然上人秘傳遠流記
- 七、法然上人惠月影
- 八、史料と抄錄

玉葉、明月記、三長記、皇代略記、皇代曆、仁和寺御
 日次記、立川寺年代記、皇帝紀抄、百鍊抄、七箇條制
 誠連署、愚管抄、念佛無間地獄鈔、教行信證、摧邪輪
 古今著聞集、沙石集、平家物語、私聚百因緣集、元亨
 釋書、淨土法門源流章、獅子伏象論、淨土十勝節箋論

口 繪

- 1、勢至丸比叡山へ 2、上人讚岐松山にて觀櫻詠歌す
- 3、時國夫妻祈請 4、産室と兩幡の奇瑞 5、夜討と小
 矢兒の武勇 6、小兒故郷を出ず 7、鳥羽のつくり道に
 て 8、小兒剃髮 9、嵯峨清涼寺に參籠 10、藏俊僧都
 を訪ふ 11、夢定中善導和尚に對面す 12、頭光踏蓮の奇
 瑞 13、大原の不斷念佛 14、名號を授く 15、則にて念
 佛す 16、天王寺西門にて施粥 17、法性寺の小御堂
- 18、鹽竈地頭の饗應 19、三尊來迎 20、御往生

- 題 簽 日本學士院會員 文學博士 羽田 亨先生
- 裝 畫 藝術院會員・帝室技藝員 堂本印象先生
- 題 字 總本山知恩院門主 岸 信宏親下
- 序 文 京都大學名譽教授文學博士 西田直二先生